平成復元の検証――報告資料

（2022年２月16日 改訂版）

安里　進（首里城復元に向けた技術検討委員）

Ⅰ　平成復元の妥当性について――検証結果の報告 ---------- 1
Ⅱ　新たな史料による検証
１、史料と絵図による正殿と周辺施設の変遷表（1660年正殿焼失以降） ---------- 4
２、大龍柱台石の設置時期についての新史料―1760年地震説の検証 ---------- 6
Ⅲ　遺物・残欠による検証
１、遺物・残欠による検証の基礎作業――龍柱と欄干の型式分類と編年 ---------- 8
２、戦前大龍柱以前の大龍柱（Sb-美１）――木曳門採集龍柱片の分析 ---------- 19
３、正面向き大龍柱残欠（Sc-博６）の欄干連結状態――ホゾ穴の検討 ---------- 22
４、「正面説」の親柱と羽目石の組み立ては妥当か――西村説の検証 ---------- 27
５、戦前大龍柱は欄干に連結していたのか――西村説の検証 ---------- 30
６、大龍柱のノミ跡を琉球人は見ることができたか――「ノミ跡丸見え説」の検証 ---------- 33
Ⅳ　絵図による検証
１、絵図による検証の基礎作業――正殿と大龍柱を描いた絵図の集成と分析 ---------- 36
２、『寸法記』大龍柱図の珠取前脚――「逆描画」の検証 ---------- 43
３、龍頭の正面向きと横向きの描き分け――エジプト絵画による解釈の検証 ---------- 52
４、「城元設営図」と「城元仲秋宴図」の検討――制作年代の検討経過 ---------- 55
５、『寸法記』・「城元仲秋宴図」――描画精度の検証 ---------- 58
６、伝呉著仁筆「首里那覇全景図屏風」――年代の検証 ---------- 62

Ⅴ　古写真による検証
１、古写真の編年と大小龍柱・欄干の損壊過程 ---------- 68
２、ルヴェルテガ撮影の「王国末期古写真」の分析――王国末期の大龍柱損傷 ---------- 71
３、「王国末期古写真」の画像輝度解析による正殿外壁の色 ---------- 75

Ⅵ　漆塗装関係報告資料 ---------- 80
2021.6.8　報告資料　御差床・おせんみこちゃの「桐油塗り」の再検討
2021.8.24　報告資料　『御冠船之時御道具之図』の「黄色塗」と「黄塗」の検討
2021.10.15　報告資料　黄塗・黄色塗・桐油塗の史料分析の総括

Ⅶ　屋根瓦の分析（割愛）

Ⅰ　平成復元の妥当性について――検証結果の報告

1）平成復元の妥当性について検証してきた

・「首里城復元に向けた技術検討委員会」の委員としての私の役割は、平成復元が妥当だったか否かを、学術的に検証することだと考えている。

・平成復元については、大龍柱の向き、外壁の色、屋根瓦の色が度々議論になってきた。これらの問題について、私の研究分野である考古学研究・図像研究・漆工史研究から、資料調査と分析を行ってきた。また、史跡整備事業に関わってきた経験をとおして、史跡における正殿復元の在り方についても意見を申し上げた。

・私なりの結論として、平成復元は概ね妥当と考えるが、引きつづき検討すべき課題も少なくない。

・首里城復元は、令和の復元で完了するものではなく、新たな情報の収集と研究の積み重ねによる見直し、将来もつづくメンテナンスや解体修理を含めたエンドレスの事業だと考えている。

・以下は、安里個人の研究者としての意見である。

2）正殿復元の基本資料について

・首里城正殿は創建以後、災害や老朽化だけでなく政治的理由などで何度もその姿形を変えてきた。17 世紀以後だけでも、2 回の焼失と再建、2 回の大規模な解体修理が行われた。その度に外観や内部構造が変化してきた。

・そうした経過を経た正殿の復元では、どの時期の正殿を復元するのかを選択しなければならない。当然ながら、外観だけでなく内部構造・塗装技法・装飾文様など全体にわたって詳細に記載された史料にもとづいて、その時期の正殿復元を目指すことになる。

・その史料は、1768 年の解体修理記録『寸法記』（『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』）と 1846 年の解体修理記録『御普請絵図帳』（『百浦添御御普請絵図帳』）をおいて他にはない。令和の復元でも両史料を基本に復元するのは妥当と判断した。

・ルヴェルテガ撮影の王国末期古写真は、外観の形状は分かるが、外壁の色や塗装技法は不明で、さらに正殿内部の状態については全く分からない。

3）正殿内外の漆塗装の見直しについて（安里報告資料Ⅵ参照）

・平成復元以後、首里城関係で研究が大きく進展した分野が琉球の漆工技術である。

・平成復元では、火の神を祀った「おせんみこちゃ」や玉座の壁の「桐油黄塗」を黄色に復元したが、黄色顔料を使用しない茶系色調だったことが判明した。

・外壁の色については、王国末期古写真の輝度解析から、黒色ではなく赤色系だったことが判明したので、平成復元を踏襲して弁柄色に塗装するのが妥当である。

・外壁の塗装に使用する弁柄は、文献史料にある「久志間切弁柄」を復元生産して使用する方向で進めてよいと考える。

4）、正殿屋根瓦の瓦当文と色について（報告資料割愛）

・平成復元では、瓦の瓦当文について、丸瓦は 18 世紀初頭から登場する「ろ」タイプ、平瓦は 18 世紀～19 世紀に主流となる「ａ」タイプとした。今回は、近世琉球瓦研究の成果をふまえて、『寸法記』「尚家文書」の年代にあわせて丸瓦も平瓦と同じ 18～19 世紀に主流となる「い」タイプとする方針は妥当である。

・瓦の色については、昭和の修理まで灰色系瓦が多数残っていたことが明らかになっているが、一方では全体的に赤色または茶色系色調という史料もある。また、赤色系と灰色系の割合など未解明の課題があること、実際に県内で灰色瓦を焼成することが現状では困難なことから、今回も総赤瓦で復元せざるを得ないと判断した。灰色系瓦の扱いについては今後の検討課題である。

5）、大龍柱の「向き」について（安里報告資料Ⅰ～Ⅴ参照）

・大龍柱の向きについては、正面向きで復元すべきだという主張がある。

・大龍柱の向き以外については、1768 年の『寸法記』と 1846 年の「尚家文書」を基本に復元することに異論はないと思うので、論点は「大龍柱の向き」と「大龍柱台石の有無」である。

・『寸法記』などの〈台石上で向き合う〉形、王国末期古写真のように〈台石上で正面向き〉、西村氏が主張する〈無台石で欄干に連結して正面向き〉のどちらが『寸法記』～「尚家文書」の時代として妥当かという問題である。

・この問題は、『寸法記』「尚家文書」にある大龍柱図の信憑性をめぐる議論でもある。

・この観点から、私は、大龍柱の向きについて、大龍柱と不可分の関係にある唐玻豊と欄干を描いた絵図などの図像約 300 点余、遺物・残欠 80 点余、古写真 20 点余を総点検した。その結果、下記について、新たな事実を明らかにし、または新たな事実をふまえた可能性を考えた。

①大龍柱と欄干は、15 世紀の創建以後、5 回またはそれ以上作り替えられた。そのうち 17 世紀以後については 3 回またはそれ以上の作り替えがあった。（報告資料Ⅲ-1）

②17 世紀には、欄干とホゾ組で連結して正面を向いていた（台石はない）。（報告資料Ⅲ-３）

③大龍柱の台石は 1729 年の重修で設置された。（報告資料Ⅱ-2）

④戦前の大龍柱には、欄干に連結するホゾ穴はなく、制作当初から台石上に立てられていた。（報告資料Ⅲ-5）

⑤王府の絵師は、龍頭の正面向きと横向きを描き分けている。（報告資料Ⅳ-3）

⑥王府絵師が業務遂行上描いた絵図では、1720 年以前はＡパターン〈無台石・正面向き大龍柱〉という構図だが、1768 年『寸法記』～1846 年「尚家文書」の間はＢパターン〈台石上で向き合う大龍柱〉という構図である。（報告資料Ⅳ-1）

⑦王国末期古写真のＣパターン〈台石上で正面を向く大龍柱〉という構図は、王国末期に民間絵図に初めて登場して以後明治期に多く描かれている。（報告資料Ⅳ-１）

⑧王国末期古写真の正面向き阿行大龍柱には大きな補修跡がある。この補修跡は、王国末期に大龍柱の向きを変えるなどの改変による損傷があったことを示唆する。また、明治期にこの補修跡の部分から阿行大龍柱が折れたために大龍柱が切断・短縮に至ったと考えている（報告資料Ⅴ-2）

⑨西村氏が主張する〈末広石階段の欄干に大龍柱が連結して正面を向く〉（台石はない）という構図の絵図は今のところ一枚も確認できない。（報告資料Ⅳ-1）

⑩當眞氏の「ノミ跡丸見え」説で大龍柱の正面向きを証明するのは無理がある。（報告資料Ⅲ-６）

・以上から、1768 年『寸法記』～1846 年「尚家文書」の〈台石上で向き合う〉形の大龍柱図は信頼できると判断した。
・王国末期に〈台石上で向き合う〉形を〈台石上で正面向き〉に変えたために阿形大龍柱が大きく損傷し、この損傷が明治期の阿形大龍柱の折損につながった可能性がある。
・西村氏が主張する〈末広階段の欄干に大龍柱が連結して正面を向く〉形は歴史上存在したか疑問がある。

史料・機関等略称一覧

『寸法記』　　：『百浦添御殿御普請付御絵図并御材木寸法記』
『御普請絵図帳』：『百浦添御普請絵図帳』（尚家文書）
県埋文　　：沖縄県立埋蔵文化財センター
県博美　　：沖縄県立博物館・美術館
美ら島財団　　：一般財団法人沖縄美ら島財団
県図　　：沖縄県立図書館
風樹館　　：琉球大学博物館（風樹館）

Ⅱ　新たな史料による検証

Ⅱ-1　史料と絵図による正殿と周辺施設の変遷表（1660 年正殿焼失以降）

・次ページの年表は、本報告の理解を助けるために作成した「史料と絵図による正殿と周辺施設の変遷表」である。正殿と周辺施設の変遷を分かりやすいように色づけしてある。
・下記のことに留意して、この変遷表をみていただきたい。

1）正殿などの様式変化の背景

・正殿と周辺施設は、17 世紀以降、正殿の焼失や大破による再建を機にその様式が変化した。
・正殿は、外観では唐玻豊が〈柱間 1 間の唐玻豊〉から〈柱間 3 間の大唐玻豊〉に様式が変わる。
・正殿正面の石階段は、直線階段（平行耳石階段）から末広階段（ハの字階段）に変わる。
・屋根葺きも、〈板葺き〉→〈灰色系瓦葺き〉→〈赤色系瓦葺き〉へと変わっていった。
・正殿は、外観だけでなく玉座の位置などの内部構造も変化している。
・奉神門は、〈長屋門〉→〈3 棟 3 門型式〉→〈1 棟 3 門型式〉という様式変化を繰り返した。
・広福門も〈1 棟 1 門〉から〈3 棟 1 門〉へと様式を変えた。

・こうした正殿などの様式変化は、焼失・再建や重修を契機にしているが、その背景には、琉球王権の内部事情だけでなく、宗主国である中国との政治的関係が大きく影響していたと考えられる。
・特に正殿と御庭は、中国皇帝による冊封儀礼の場という国際政治の場でもあった。琉球側の主体性で思いのままにできるものではなかったことを押さえておく必要がある。
・清朝以後にあっては、龍文様は、皇帝と琉球国王のような冊封国の関係を規定する政治的意味合いを帯びた文様だった。首里王府側の意向で思いのままに、あるいは絵師の技量で適当に変えられるものではなかったことを知っておくべきだろう。

2）変化する大龍柱

・大龍柱も、中国との政治的関係のなかで、正殿基壇などの様式変化に連動して変化してきたと考えるべきだろう。
・大龍柱は、本報告で分析したように、石質が〈沖縄外石材〉→〈沖縄内石材〉へと変化した。
・〈無台石で欄干に連結〉から〈欄干から分離して台石上で自立〉する形状に変化した。
・大龍柱と遺物・残欠の分析から、15 世紀の創建以降少なくとも 5 回もしくはそれ以上に作り替えがあったことも分かった。
・17 世紀以降の大龍柱をみても、少なくとも 3 回ないしはそれ以上の作り替えが行われている。
・こうして正殿などとともに様式変化を遂げた大龍柱が、向きだけは一貫して「正面向き」だったことを主張するためには、実証的な裏付け作業と、中国との政治的関係のなかでも説明しなければならない。

表１：史料と絵図による正殿周辺施設の変遷(1660年焼失以後)

広福門	奉神門	唐破風柱間	石階段	大龍柱台石	大龍柱	正殿の焼失・再建・重修	国王	年号		西暦	事項（赤文字は大龍柱関係絵図など）
正殿など焼失							尚質	順治	17	1660	9/27王城宮殿を焼き尽くす。
?	?	?		無台石	儀保為宣大龍柱制作	正殿など再建	尚貞	康熙	5	1666	**儀保親雲上為宣、小禄間切に龍柱の石材を求め10月起工。**
									6	1667	**6月大龍柱竣工。**
									9	1670	2/12正殿重修起工。
	長屋門								10	1671	2/14正殿重修竣工。瓦葺き化。南風之御殿・御番所・広福門・長御門など竣工。
									10	1671	地震あり。
						正殿など修補			21	1682	百浦添修補奉行。
									22	1683	**尚貞冊封。**
						正殿修補			25	1686	8/7百浦添修補10/26竣工。
					改修なし	正殿修補			43	1704	2/23因百浦添大修補任総奉行。**龍柱は取り外さずに正殿改修。**
									44	1705	百浦添御殿普請成就。
1棟1門	長屋門	1間	直線	無台石	正面					1701-07	「**首里城古絵図**」御庭は歪な四角形。
1棟1門	長屋門	1間	直線							1709以前	「**琉球首里ノ図**」
国殿・南北諸殿焼失									48	1709	11/20国殿・南北諸殿焼失。
改築なし	3棟3門					正殿など再建	尚益		49	1710	10/12正殿起工。
				無台石	謝敷宗相大龍柱製作				50	1711	**2/14謝敷宗相、彫琢龍柱欄干・唐礎・大庫裏・御差床の彫物主取　10/11龍柱を立つ。**
							尚敬		51	1712	正殿重建
									52	1713	毛文哲・蔡温、正殿・御庭浮道の風水見分。
									53	1714	**謝敷宗相、先年の龍柱・下之御庭欄干調製で表彰。**
									54	1715	4月国殿・南風御殿・西御殿・君誇ほか、**墀上龍柱・欄干・君誇欄干・獅柱など成る。**＊広福門なし。
1棟1門	3棟3門	1間	直線	無台石	正面				58	1719	**尚敬冊封。**「**冊封中山王図**」、冊封琉球全図の「**冊封儀注図**」「**仲秋宴図**」
	改修詮議		改修なし		改修なし	改修詮議			61	1722	**百浦添君誇門石デイシ龍柱下の御庭欄干の改修を詮議。石デイシ・龍柱はこれまでどおり。龍柱欄干を唐に注文は決定せず。**
		正殿大破						雍正	6	1728	百浦添大破。
改規造営				有台石		正殿など重修			7	1729	1/26起工閏7/30竣工。**唐玻豊石庭石広福門改規造営。**王座を正中に改める。殿庭は北、下庫理は南を貴しとす。 7/22**龍柱台石を首里城へ持ち登る**、閏7/8**龍柱立て申すべき事**
3棟1門	3棟3門	1間	直線？末広？		?					1729-33	「**首里古地図**」
	1棟3門					奉神門大破	尚穆	乾隆	19	1754	**奉神門大いに壊れ華式に倣い１棟３門に改修。**
	1棟3門								21	1756	**尚穆冊封。**石欄周護花鳥彫刻。奉神門左右三門。
					修補	大龍柱修補			24	1759	**3/18田里親雲上、百浦添龍柱等所壊之處堅留、修補等相調で表彰。**
		国王居宅大破							31	1766	国王居宅大破。
		3間	末広	有台石	向き合い	正殿重修			32	1767	9/3百浦添重建起工。
									33	1768	6/26竣工6/19遷御。**『寸法記』の大龍柱図**
							尚温	嘉慶	5	1800	**尚温冊封。**石欄周護し花鳥を雕刻。『琉球国誌略』を踏襲か？。
							尚成				
							尚灝		13	1808	**尚灝冊封。**
						正殿重修			16	1811	王殿重修10/1竣工
	1棟3門	3間	末広	有台石	向き合い		尚育	道光	18	1838	**尚育冊封。**「**首里城正殿前城元仲秋宴之設営絵図**」「**首里城正殿前城元設営図**」
		3間	末広	有台石	向き合い	正殿重修			26	1846	正殿重修。欄干は取除き龍柱并石デイシは囲う事。**正殿図の大龍柱**
					向き合い			咸豊	5	1855	**正殿絵図の大龍柱は向き合い**
							尚泰		9	1859	屢々地震アリ。
					?			同治	5	1866	**尚泰冊封。**
									13	1874	12月大地震。其ノ後日ニ月ニ地震アリ。
		3間	末広	有台石	正面			光緒	3	1877	5/16「**ルヴェルテガ正殿古写真**」
								明治	12	1879	琉球処分
					正面				14	1881	大龍柱、正面ニ顔ヲ擡ゲ。
									29	1896	分遣隊撤収。
									42	1909	首里城を首里に払い下げる
								大正	12	1923	首里市会、正殿の解体決議。
									13	1924	正殿を沖縄神社とする。
								昭和	2	1927	「相談役トシテ古老ノ方々ヨリ・・旧藩当時ノ状況等ニツキ諮問」。
						正殿解体修理			3	1928	正殿修理工事始まる。
									5	1930	7月台風で正殿に被害
		3間	末広	有台石	正面				7	1932	「**沖縄神社拝殿実測図**」
		3間	末広	有台石	向き合い				8	1933	正殿修理工事竣工。**古式に倣い龍柱を向合いに変更。「現在正面向キヲ古代ノ通り向合ニ据直スコト」**
									15	1940	大龍柱の向きが議論になる。「どの型式が古式に敵ふか今少しの研究を要する」。
						正殿など焼失			20	1945	沖縄地上戦

Ⅱ-2　大龍柱台石の設置時期についての新史料――1760 年地震説の検証

要旨

・大龍柱の台石が何時設置されたのかは、大龍柱の向きをめぐる重要な論点の一つである。

・西村氏は、〈末広石階段の欄干に連結して正面を向く大龍柱〉が「本筋」という立場から、台石は本来存在するものではなく、1760 年の地震で大龍柱が倒壊したため応急措置として設置したという推定を繰り返し主張している（西村 1993：p.100、2020ｂ）。

・ところが最近、大龍柱台石を設置した時期を記載した史料の存在が明らかになった。
・比嘉景常（1940）が紹介した、1729 年の正殿重修で、台石を首里城へ持ち登る方法を検討した『百浦添御普請帳』の記事である。

・この記事によって、西村氏の「1760 年地震説」は成立する余地が全くなくなった。
・また、本報告Ⅳ-１で論じたように、台石の設置は大龍柱が石階段の欄干から分離して台石上で自立していたことを意味している。
・1768 年の『寸法記』時点で、末広石階段が登場した時にはすでに大龍柱は台石上に立っていたことは疑問の余地がない。
・この点でも、西村氏が想定する〈末広石階段の欄干に連結して正面を向く大龍柱〉という構成が歴史上存在したのか疑問が生じる。

1）『百浦添御普請帳』の記事

・比嘉は、1940 年 1 月 1 日～6 日の「琉球新報」に「首里城正殿の大龍柱に就いて」と題して論考を掲載している。そのなかで『百浦添御普請帳』から、雍正 7 年（1729）7 月 22 日の大龍柱台石に関する次の記事を引用している。この記事は、1728 年に大破した百浦添（正殿）の重修にともなう記事である。正殿重修は、1729 年 1 月 26 日起工して 7 月 30 日に竣工している。

龍柱台石、持ち登り候儀、日用頭共呼び寄せ、色々かけ引きを以て、此程相働かせ候へども□日御普請について、諸方へも日用數多召し使はれ候。其他二百人程の持口最早相達し申さず儀に御座候。尤も御普請回の日用召し使ひ申すべく候へども、其儀に於いては、御普請方差□先様の手□相違し、念遣存じ候間首里三平等の諸士にて引き上げられ候様御仰せ付けられ候ては何様に御座候か、御差圖を得奉候。以上。

・また、閏 7 月 8 日　巳の時の記事として次の文も引用している。
右百浦添、石の龍柱立て申すべき事。

・大意は、「龍柱台石」を（首里城へ）持ち上ることについて、日用頭と交渉したが色々課題があるので、三平等の諸士に仰せつられてはどうでしょうか、御差図ください、という内容だ。
・日用頭との交渉が難渋したことや三平等の諸士を動員しようとしているところをみると、結構大きな台石だったと思われる。その後のどのようにして首里城に運び込んだのかは不明だが、翌月の 8 日に無事大龍柱を立てている。

２）『百浦添御普請帳』の検証

・1729 年に大龍柱台石を設置したという『百浦添御普請帳』の記事について、他の文献史料・大龍柱残欠・絵図の分析成果から検証してみよう。

・1728 年に大破した正殿前に建っていた大龍柱は、大破の 13 年前に謝敷宗相が制作した大龍柱である。謝敷の大龍柱は、1709 年に焼失した正殿の再建にあわせて制作したものだ。家譜の記録には、謝敷の大龍柱各部分の細かな寸法の記載はあるが台石については記載がない（比嘉 1933）。台石がなく欄干とホゾ組で連結していたと考えられる。
・大龍柱台石については、1666 年に儀保為宣が制作した大龍柱でも各部寸法の記載はあるが台石の記載はない。
・沖縄県立博物館・美術館蔵の大龍柱片 Sc-博 6 は、本報告Ⅲ-1 の遺物・残欠で編年したように 17 世紀の大龍柱である。この大龍柱については、本報告Ⅲ- 3 で詳細に分析して明らかにしたように、無台石で石階段欄干にホゾ組で連結して正面を向いていたことを確認している。
・また、本報告Ⅳ- 1 の絵図で検証したように、18 世紀初頭から 1719～20 年の絵図までは台石が描かれていない。
・つまり、17 世紀から 1728 年に正殿が大破するまでの大龍柱には、台石がなかったことが『百浦添御普請帳』以外の文献史料、考古資料、王府絵図でも確認できる。

・そして、『百浦添御普請帳』にある 1729 年の台石設置以降になると、古文書、絵図、遺物・残欠でも台石の存在を確認することができる。
・まず、1768 年の『寸法記』でも 1846 年の「尚家文書」で台石の具体的な寸法が記載されている。
・王府絵図では『寸法記』以後の全ての絵図に大龍柱台石が描かれている。
・本報告Ⅲ-5 で検証したように、戦前大龍柱の遺物・残欠や古写真には欄干に連結するホゾ穴がなく、制作当初から欄干に連結することなく台石上で自立していた。

・以上の検証から、『百浦添御普請帳』に記載されているように、〈無台石で石階段欄干にホゾ組で連結していた大龍柱〉が、1728 年の正殿大破を機に 1729 年の正殿重修で、〈欄干から分離して台石上で自立する大龍柱〉に変化したことが明らかになる。
・そして、正殿正面の石階段が直線階段（平行耳石階段）から末広階段（ハの字階段）に変化したのは、1729 年の台石設置以後である。末広階段が登場した時には、大龍柱は石階段の欄干から分離して台石上で自立していたことも明らかになった。
・このことは、西村氏が「本筋」だとして想定する〈末広階段の欄干に連結して正面を向く大龍柱〉という構図が果たして歴史上存在し得たのかという疑問につながる。

引用文献

西村貞雄 1993「首里城正殿・大龍柱の「向き」につての考察」『琉球大学教育学部紀要』第 42 集第 1 部、琉球大学教育学部、pp.75－105。
西村貞雄 2020 b「独自性と大龍柱（下）」首里城再建を考える②、沖縄タイムス、9 月 23 日。
比嘉景常 1940「首里城正殿の大龍柱に就いて」（一～三）琉球新報、1 月 1 日、5 日、6 日。

Ⅲ　遺物・残欠による検証

Ⅲ-１、遺物・残欠による検証の基礎作業――龍柱と欄干の型式分類と編年

要旨

・これまで大龍柱の正面向きを主張する論者で、実際に遺物や残欠を調査・分析したうえで議論している方は、私の知る限りでは西村氏と當眞氏の御両人で、しかも正面向きの物証として提示した遺物・残欠は数点に過ぎない。大小龍柱と不可分の関係にある石階段の欄干部材については、西村氏が２点の欄干部材を取り上げているだけである。

・大小龍柱の遺物・残欠は私が確認したもので 32 点、欄干部材は 55 点ある。
・この項では、87 点の大小龍柱・欄干部材の遺物・残欠を集成した。
・そのうえで、遺物・残欠の観察と発掘調査報告書をもとに分析した成果をふまえて、大小龍柱・欄干部材の型式編年を行った。　型式編年は、遺物・残欠に年代情報を与える作業である。

・遺物・残欠については、県埋蔵文化財センター、琉球大学風樹館、県立沖縄県立博物館・美術館で、1996 年 6／６、2021 年 6／2 日・11／15・11／22 に調査を実施した。

・大小龍柱・欄干部材の型式編年から指摘できることは、下記４点である。

①大小龍柱と欄干部材には、石質と彫刻のちがいからみて少なくとも５型式がある。遺物・残欠という物的証拠でみると、大小龍柱と欄干は少なくとも５回（もしくはそれ以上）制作されている。

②大小龍柱と欄干部材は、15～16 世紀の青石製・溶結凝灰岩製・安山岩製から、17 世紀以後は砂岩（ニービヌフニ）製へと変遷した。沖縄外石材→沖縄内石材へという変遷である。

③17 世紀以後の砂岩製は少なくとも３型式がある。戦前の大小龍柱・欄干を含め、少なくとも３回（もしくはそれ以上）制作されている。

④沖縄県立博物館・美術館蔵の大龍柱片（Sc-博 6）は、1666 年に儀間為宣が制作した大龍柱である可能性がある。

1）遺物・残欠の集成

・大小龍柱・欄干の遺物・残欠は、沖縄県立埋蔵文化財センター（県埋文）に発掘調査による出土遺物が保管され、沖縄県立博物館・美術館（県博美）と琉球大学博物館（風樹館）には、戦後収集した残欠が収蔵されている。また、沖縄美ら島財団（美ら島財団）にも残欠１点が収蔵されている。
・県埋文の収蔵物は、ほとんどが発掘調査報告書に実測図・写真が掲載されているが、一部、報告書に取り上げられていない遺物もある。
・現在までに確認した遺物・残欠は、87 点である（大龍柱 28 点、小龍柱３点、大小龍柱不明１点、親柱 10 点、束石 13 点、親柱または束石６点、羽目石 15 点、笠石７点、地覆石４点）。この他、発掘報告書で欄干部材としているが疑問のものが４点ある。

・これらの龍柱・欄干遺物について集成表を作成した（Ⅲ－１文末**表３・表４**）。

2）大龍柱・小龍柱の遺物・残欠の分類

・分類は、石質、背棘の形状、ウロコ彫刻の仕様（とくに腹面ウロコの彫刻仕様に特徴が現れる）を基本に、胴体部ウロコの寸法を参考にして行った。

・石質でみると、沖縄産の砂岩（ニービヌフニ）が多いが、他に溶結凝灰岩と青石がある。
・溶結凝灰岩製には、大小龍柱片と欄干親柱片があり、溶結凝灰岩製の時代が存在したことは確かだ。
・溶結凝灰岩は、火山噴火による火砕流が溶結した岩石で沖縄には産出しない。九州では仁王像などの大型石造物に広く使用されている。
・青石は、中国福建省産の「青石」と考えられている石材で、輝緑岩の他に細粒の斑糲岩や砂岩を含んでいることが指摘されている（加藤 1985、宇佐美ほか 2018）。
・砂岩製遺物・残欠については、戦前古写真の大小龍柱に遺物・残欠の写真または実測図を重ねて同一部分か否かを確認したうえで、戦前の大小龍柱か否かを判断した。

・型式分類は、石質で区分したうえで、上記した彫刻の特徴で細分（**図 1**）し、記号化した。

Sa：戦前の大小龍柱。県博美蔵大龍柱残欠、風樹館蔵小龍柱残欠、正殿地区出土遺物など 11 点。
彫りが深い。ウロコ寸法は、腹面縦長 6.0～6.6 ㎝、胴部縦長 6.0～6.5 ㎝で画一的。背棘の形態は鋸歯状。

Sb：木曳門採集残欠 1 点。京の内出土の大龍柱片（県埋文 2021：p.13）も Sb 型式の可能性がある。
戦前の大小龍柱 Sa や Sc とは明らかに異なる（Ⅲ- 2 、安里 2010 参照、）。
彫りは戦前大龍柱より浅い。胴部のカスガイ打ち込み溝周辺が無彫刻部分。胴部ウロコの縦長は 4.6～9.0 ㎝とばらつきがある。背棘の形状は不明。

Sc：県博美蔵の大龍柱残欠大破片や首里城出土の大小龍柱片など 5 点。
複数時期の龍柱を含む可能性がある。
彫りが浅く線彫り状。腹面と胴部のウロコ境界を 1 本の浅い線で仕切る。欄干との連結部分が無彫刻。背棘は特徴のある楕円形（南瓜種子状）。ウロコ寸法は、腹面縦長が 3.2～3.8 ㎝と狭い。

Sx：ニービヌフニ製だが、小破片などのため分類不明または未定の大小龍柱片 10 点。

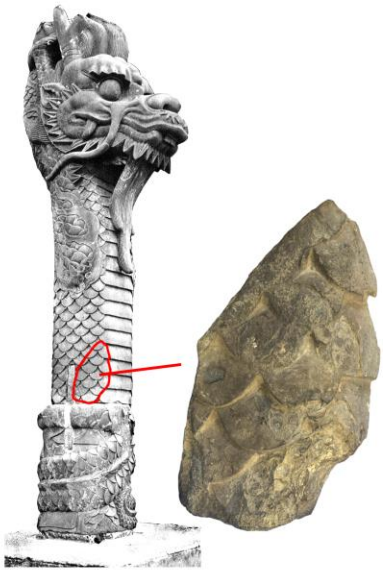
We：溶結凝灰岩製。正殿地区出土遺物 3 点。大小龍柱片がある。

Ao：青石製。風樹館蔵の大龍柱残欠 1 点。彫りが浅い。この残欠は大龍柱か小龍柱か不明。

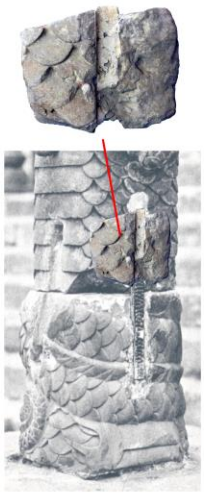
・分類表記――個々の遺物・残欠について、種類・型式・所蔵・報告書図版№を下記のように記号化した。

所蔵――――――――埋（県埋文）、博（県博美）、風（風樹館）、美（美ら島財団）
報告書図版№――――2016-57（2016 年刊行報告書の図版番号 57）
例　**大龍柱 Sa-埋 2016-57、小龍柱 Sa-風、大龍柱 We-埋 2016-62**

砂岩Sa（戦前龍柱）
彫りが深い。背棘の形態は鋸歯状。全面彫刻され、無彫刻部分がない。ウロコ寸法は腹面縦長6.0～6.6cm、胴部縦長6.0～6.5cmと画一的



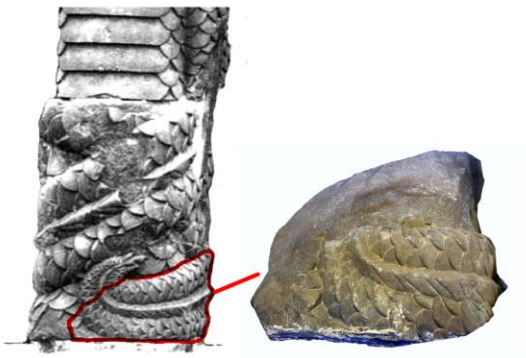
大龍柱Sa-埋2016-57



大龍柱Sa-博1

小龍柱Sa-風2

大龍柱Sa-博3



大龍柱Sa-埋2016-58

大龍柱Sa-風1

サイズ不同

大龍柱Sb-美1

砂岩Sb
戦前のSa型式やSc型式とは彫刻仕様が異なる。胴部に無彫刻部分がある。彫りが深い。胴部ウロコ寸法は横幅4.6～9.0とばらつきがある。

図１：大小龍柱の型式分類

図２：大小龍柱の型式分類

3）戦前の基壇・石階段欄干の形状

・欄干部材の分類の前に、欄干について説明しておく。
・欄干は、正殿基壇の上、その両側の登り高欄、唐玻豊正面の石階段に設置されている。
・欄干部材には、親柱・束石・羽目石・笠石・地覆石がある（**図３**）。

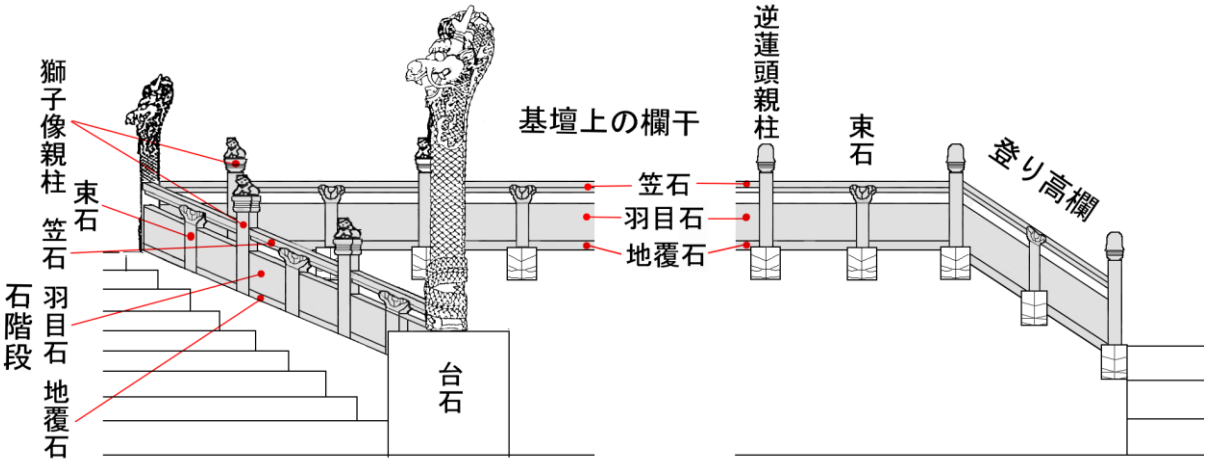


図３：正殿基壇と石階段の欄干部材

・親柱には、二重蓮華座の上に獅子像を彫刻した「獅子像親柱」と、単蓮華座の上に逆蓮頭を彫刻した「逆蓮頭親柱」がある（図４）。
・基壇欄干には、獅子像親柱と逆蓮頭親柱がある。基壇両端の「登り高欄」の親柱は、逆蓮頭だけである。唐玻豊正面の石階段親柱は全て獅子像親柱。

図４：親柱の頭部（県埋文調査報告書 2016 より）

・束石の頭部の握蓮には、柱身とともに１個の石材で作られた「握蓮柱身一体型」と、柱身とは分離した「握蓮柱身分離型」がある（**図 5**）。
・羽目石は、文様面が無文と有文（花鳥龍鳳凰などの浮彫り）がある。無文も文様面の枠取りの違いや、羽目石下縁の雲形刳りに違いがある。刻字されたものもある。（図省略）。
・笠石と地覆石も無文である（図省略）。

図 5：束石の握蓮部（県埋文調査報告書 2016 より）

・欄干部材は、設置場所（基壇、登り高欄、石階段）によって形状が異なる。
・平坦な基壇欄干では、親柱のホゾ穴（笠石や羽目石のホゾを嵌め込む）の位置は、**左右等位置**にある。羽目石も長方形で、笠石・地覆石も単純な長方形角材である。
・登り高欄と石階段では、斜め階段に欄干部材が取り付くので、親柱のホゾ穴の位置は**上面側と下面側でズレがある**。束石も握蓮の形が斜めになり、羽目石も平行四辺形になる。笠石も両端部が斜めになるが、最上部の笠石の端部は屈曲している。地覆石も両端が斜めになる。
・正面石階段と基壇左右の登り高欄は、階段勾配が異なるので、親柱ホゾ穴の位置、羽目石の形状、束石の握蓮部形状、笠石と地覆石の両端部の形状が異なる。

・なお、奉神門の基壇にも欄干があるが、獅子像親柱は丸柱で、逆蓮頭親柱には蓮華座がないという違いがある。羽目石の代わりに正殿基壇にはない平桁がつく。ただし、束石、笠石、地覆石は正殿基壇部材との区別は今のところできていない。

4）欄干部材の型式分類（表１）

・欄干部材の遺物・残欠には、戦前の部材とは異なる石質や彫刻仕様の遺物・残欠がある。これらを、戦前欄干部材とは別型式として分類した。一部に分類未定の遺物・残欠がある。

・まず、石質による分類を説明する。
・石質による分類は、大小龍柱の分類を踏襲し、新たに **An(安山岩)を加えた**。
・戦前の欄干部材は大小龍柱と同じく **Sa** とした。
・石質は砂岩 Sa だが、戦前の欄干部材と異なる彫刻仕様の部材は、**親柱は Sg、束石は Sx、羽目石は Ss・St・Su・Sv に分類した**。
・分類未定の遺物・残欠は **Sx** とした。

・**表１**は欄干部材の型式分類表、図３は親柱の型式分類である。

表１：基壇・石階段欄干部材の型式分類

部材	分類		特徴
親柱	**Sa**	砂岩	戦前部材、獅子像・二重蓮華座
	Sa	砂岩	逆蓮頭・単蓮華座
	Sg	砂岩	獅子像・単蓮華座
	We	溶結凝灰岩	逆蓮頭
束石	**Sa**	砂岩	戦前部材、握蓮・柱身一体型
	Sx	砂岩	握蓮・柱身一体型 、「世の主」銘あり
	Sx	砂岩	握蓮・柱身分離型
	Sx	砂岩	握蓮・柱身分離型、握蓮が扁平
	An	安山岩	握蓮・柱身分離型
羽目石	**Sa**	砂岩	戦前部材
	Ss	砂岩	内側枠取りの形状が異なる
	St	砂岩	刻字あり
	Su	砂岩	龍・獅子・鶴亀・菊花・鳳凰などの浮彫がある
	Sv	砂岩	下縁の雲形がSaと異なる
笠石	**Sa**	砂岩	戦前部材
	We	溶結凝灰岩	登り高欄部材

5）大小龍柱・欄干部材の型式編年

・石質によって、沖縄外石材（Ao 青石・We 溶結凝灰岩・An 安山岩）と沖縄内石材（S 砂岩＝ニービヌフニ）に大別できる。

・Ao 青石は、15～16 世紀の石造物に多く使用され、17 世紀以降は殆ど使用例がない石材である。

・S 砂岩は、17 世紀以降の大小龍柱や欄干に使用された石材である。
1666 年に儀保為宣が制作した大龍柱と 1711 年に謝敷宗相が制作した大龍柱は、ニービヌフニが産出する小禄間切や豊見城間切から石材を調達している。
県埋文の首里城跡銭蔵地区の発掘調査で、第 2 期（17 世紀前半）の「石造品加工場跡」から大量の細粒砂岩（ニービヌフニ）の石材片と未製品が出土している（県埋文 2015：p.307）。

・以上から、ニービヌフニ製の大小龍柱と欄干の遺物・残欠の年代は、17 世紀前半～19 世紀であることが確認できる。

・砂岩製のうち、大龍柱 Sc-博 6 は、**無台石**で欄干に接続して正面を向いていたことが判明した（Ⅲ-3 参照）。大龍柱の台石は 1729 年以後に登場しているので（Ⅱ-1 参照）、大龍柱 Sc-博 6 は、1729 年正殿焼失以前であることが分かる。

・大龍柱 Sc と大龍柱 Sb はどちらが古いか確実ではないが、ウロコ彫刻仕様からみて彫りが浅く線彫り状の大龍柱 Sc が古く 17 世紀代とみている。

・おそらく、大龍柱 Sc-博 6 が 1666 年に儀保為宣が作製した大龍柱に当たると考える。

・以上の検討をもとに整理した遺物・残欠の編年が**表 2** である。

表 2：大小龍柱・欄干部材の型式編年

<table>
<tr><th></th><th>大龍柱</th><th>小龍柱</th><th>親柱</th><th>束石</th><th>羽目石</th><th>笠石</th><th>地覆石</th><th></th></tr>
<tr><td rowspan="2">19c.</td><td>砂岩Sa
(戦前大龍柱)</td><td>砂岩Sa
(戦前小龍柱)</td><td>砂岩Sa
(戦前部材)</td><td>砂岩Sa
(戦前部材)</td><td>砂岩Sa
(戦前部材)</td><td>砂岩Sa
(戦前部材)</td><td>砂岩Sa
(戦前部材)</td><td>1945：沖縄戦
1768年『寸法記』</td></tr>
<tr><td rowspan="2">18c.</td><td>砂岩Sb</td><td></td><td rowspan="2">砂岩Sg</td><td rowspan="2">砂岩Sj
砂岩Sk
砂岩Sl</td><td rowspan="2">砂岩Ss
砂岩St
砂岩Su
砂岩Sv</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td>1711：謝敷龍柱製作</td></tr>
<tr><td>砂岩Sc
17c.前半</td><td>砂岩Sc</td><td>1666：儀保龍柱製作
17c.前半：石製品加工場跡</td></tr>
<tr><td rowspan="2">16c.</td><td>溶結凝灰岩
We</td><td></td><td>溶結凝灰岩
We</td><td>安山岩An</td><td></td><td>溶結凝灰岩
We</td><td></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>青石Ao</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1508:高欄に龍柱建造</td></tr>
</table>

6）龍柱・欄干遺物の型式分類から判明したこと

・大小龍柱・欄干部材の型式編年から指摘できることは、下記４点である。

①大小龍柱と欄干部材には、石質と彫刻仕様からみて少なくとも５型式がある。これまで、文献史料から大龍柱は３回（３代）制作されたと推測されてきたが、遺物・残欠という物的証拠でみると、大小龍柱と欄干は少なくとも５回（もしくはそれ以上）制作されている。

②大小龍柱と欄干部材は、15～16 世紀の青石製・溶結凝灰岩製・安山岩製から、17 世紀以後は砂岩（ニービヌフニ）製へと変遷した。沖縄外石材→沖縄内石材へと変遷した。

③17 世紀以後の砂岩製は、彫刻の仕様からみて少なくとも３型式がある。戦前の大小龍柱・欄干を含め、少なくとも３回（もしくはそれ以上）制作された。

④石階段欄干に連結して正面を向いていた大龍柱 Sc-博 6 が、1666 年に儀間為宣が制作した大龍柱に相当する可能性がある。

引用文献

安里　進 2000「首里城木曳門裏採集の大龍柱残欠」『首里城研究』№5、首里城研究会、pp.14-19。

宇佐美賢・佐々木健志・知念正昭・新城竜一 2018「首里城の大龍柱と伝えられる残欠の石質について（短報）」『沖縄県立博物館・美術館,博物館紀要』第 11 号、沖縄県立博物館・美術館、pp.11-13。

沖縄県立埋蔵文化財センター1995『首里城跡　南殿・北殿地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『首里城跡　継世門地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2003『首里城跡　右掖門及び周辺地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2005『首里城跡　書院・鎖之間地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2007a『首里城跡　黄金御殿地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2007b『首里城跡　管理用道路地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡　御内原北地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2013a『首里城跡　淑順門西・奉神門埋甕地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2013b『首里城跡　御内原北（2）地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2015『首里城跡　銭蔵地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2016a『首里城跡　正殿地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2016b『首里城跡　銭蔵東地区発掘調査報告書』。

沖縄県立埋蔵文化財センター2021『発掘された倉庫跡』。

加藤祐三 1985「沖縄県首里城周辺の産地不明石材の岩石学的研究」『琉球大学理学部紀要』第 39 号、琉球大学理学部、pp.63-79。

表３：大小龍柱の遺物・残欠集成

分類記号凡例

石材：S(砂岩)、We(溶結凝灰岩)、An(安山岩)、Ao(青石)

砂岩Sの細分類：Sa(戦前龍柱残欠)、Sb～Sc(戦前龍柱以外)、Sx(分類未定)

所蔵：埋(沖縄県立埋蔵文化財センター)、博(沖縄県立博物館・美術館)、風(琉球大学風樹館)、美(沖縄美ら島財団)

出典：数字（例2016-57）は県埋文発掘報告書発行年と図№、国は国建撮影写真（出土地区不明)

	分類記号	部位	備考
1	大龍柱Sa-埋2016-57	頭,左脚	鋲穴あり
2	大龍柱Sa-埋2016-58	尾端	
3	大龍柱Sa-埋2016-60	頭部,牙	阿行
4	大龍柱Sa-埋2016-64	胴	鋲溝？あり
5	大龍柱Sa-博1	胴,腹,背棘	鋲溝
6	大龍柱Sa-博2	頭部	吽行
7	大龍柱Sa-博3	胴,腹	鋲溝、枘穴
8	大龍柱Sa-博4	尾	鋲、枘
9	大龍柱Sa-博5	頭部	阿行
10	大龍柱Sa-風1	鎌首部,左脚玉取り,背棘	阿行
11	小龍柱Sa-風2	鎌首部,右脚玉取り,背棘	吽行
12	大龍柱Sb?-埋2021	胴,右脚	
13	大龍柱Sb-美1	胴,左脚	鋲溝、接合枘穴
14	大龍柱Sc-埋2016-59	頭,右腕・顎髭	
15	小龍柱Sc-埋1995-3	頭,右脚,背棘	右脚玉掴み、背棘は南瓜種子形
16	大龍柱Sc-埋2007-14	胴,腹	腹・鱗が線彫り状、彫りが浅い
17	大龍柱Sc-博6	尾部,根入,腹,尾端	背棘は南瓜種子形
18	大龍柱Sc-埋国	胴,背棘	背棘南瓜種子形、発掘報告2005-に記載なし
19	小龍柱Sx-埋2016-55	胴,左脚	
20	大龍柱Sx-埋2016-56	頭,角？	
21	大龍柱Sx-埋2016-65	頭,髭	
22	大龍柱Sx-埋2016-66	頭,角？	
23	大龍柱Sx-埋2016-67	頭,頬髯	
24	大龍柱Sx-埋2016-68	胴	
25	大龍柱Sx-埋2005-76	頭？	客土
26	大龍柱Sx-埋1995-2	胴	クサビ穴、鋲溝
27	大龍柱Sx-風3	胴	
28	大龍柱Sx-風4	眼	
29	大龍柱We-埋2016-62	胴,脚	鱗の大きさが一定しない
30	大龍柱We-埋2016-63	胴,脚,背棘	鱗の大きさが一定しない
31	大龍柱We-埋2016-69	胴	枘穴あり
32	龍柱Ao-風5	胴	大龍柱・小龍柱不明

表４：欄干の遺物・残欠集成

番号	種類	分類記号	場所	部位	残存状態	備考
1	親柱	親柱Sa-埋2016-7	基壇	逆蓮頭・単蓮華座	完全	
2		親柱Sa-埋2016-8	基壇	逆蓮頭・単蓮華座	一部欠	
3		親柱Sa-埋2005-75	基壇	逆蓮頭・単蓮華座？	一部	表採
4		親柱Sa-博	基壇/石階段	逆蓮頭・単蓮華座	破片	
5		親柱Sa-風	基壇	逆蓮頭・単蓮華座	破片	
6		親柱Sa-埋2016-11	基壇	獅子像・二重蓮華座	破片	
7		親柱Sa-埋2016-12	基壇	獅子像・二重蓮華座	完全	
8		親柱Sa-風	基壇/石階段	獅子像・二重蓮華座	破片	
9		親柱Sg-埋2016-10	基壇/石階段	獅子像?・単蓮華座・唐草文帯	破片	
10		親柱We-埋2016-9	基壇	逆蓮頭・単蓮華座	破片	
11	束石	束石Sa-埋2016-13	基壇	握蓮／柱身一体型	完全	羽目石ほぞ穴あり
12		束石Sa-埋2016-14	基壇	握蓮／柱身一体型	完全	羽目石ほぞ穴あり
13		束石Sa-風	基壇？	握蓮／柱身一体型	一部	
14		束石Sa-風	基壇？	握蓮／柱身一体型	一部	
15		束石Sx-風	基壇？	握蓮／柱身一体型	一部	登り高欄
16		束石Sx-風	基壇？	握蓮／柱身一体型？	一部	「世主」銘
17		束石Sx-埋2003-1	基壇？	握蓮／分離型	一部	枘が小さい、羽目石ほぞ穴不明
18		束石Sx-埋2016-16	基壇？	握蓮／分離型？	一部	羽目石ほぞ穴不明
19		束石Sx-埋2016-18	基壇？	握蓮／分離型	一部欠	K0-97出土、羽目石ほぞ穴不明
20		束石Sx-埋2016-15	基壇？	握蓮／分離型（扁平）	完全	羽目石ほぞ穴不明
21		束石Sx-埋2016-17	基壇？	握蓮／分離型（扁平）	一部欠	羽目石ほぞ穴不明
22		束石Sx-埋2015-18	基壇？	握蓮／分離・一体不明	完全	羽目石ほぞ穴不明
23		束石An-埋2003-2	基壇？	握蓮／分離一体不明	一部	写真からみて安山岩と判断、羽目石ほぞ穴不明
24	親柱又は束石	親柱Sx-埋1995-1	石階段/登り高欄？	親柱	一部欠	枘穴9.5×5.5深さ3.5、横4.6×文×文×深さ3.5×2穴、枘穴位置が対応しない
25		柱Sx埋2013-1	奉神門？		一部	
26		柱Sx-埋2007b–15			一部	
27		束石？Sx-埋2016-26	基壇？	束石？	一部	K2-98・99、SW1。羽目石用の枘穴がない。
28		柱Sx-埋2016b-134			一部	＊枘穴がない
29		柱Sx-埋2007a-303	奉神門？	柱・根入部	一部	羽目石用の枘穴がない。
30	羽目石	羽目石a-埋2016-1	基壇		一部欠	枘幅4.0高2.5、長は枘を除く長さ
31		羽目石a-埋2016-2	基壇		完全	枘幅4.0高2.5、長は枘を除く長さ
32		羽目石Sa-埋2016-3	基壇		完全	枘幅4.0高2.5、長は枘を除く長さ
33		羽目石Sa-埋2016-4	石階段		一部欠	枘幅4.0高2.5、長は枘を除く長さ
34		羽目石Sa-埋2005-77	登り高欄		一部	客土
35		羽目石Sa-埋203-3	基壇		一部	
36		羽目石Sa-埋御(1)860	基壇		一部	枘幅3.8高1.9
37		羽目石Sa-風	登り高欄		一部	
38		羽目石Ss-埋2007b--16	基壇		一部	羽目石内枠が異なる
39		羽目石St-埋2016-6	基壇		一部	刻字あり
40		羽目石Su-埋1995-86-1	基壇	彫刻	一部欠	龍文・獅子文、枘厚3.6幅1.7
41		羽目石Su-埋1995-86-2	基壇	縁彫刻・片面無文様	半分	縁枠に唐草文、枘厚5.0
42		羽目石Su-埋1995-87-1	基壇	彫刻	一部欠	鶴亀文・菊花文、枘厚3.4
43		羽目石Su-埋1995-87-2	基壇	彫刻	一部欠	鳳凰文・龍？文、枘幅2.0厚2.8
44		羽目石Sv-埋2016-5	基壇		一部	縁雲形が異なる
45	笠石	笠石Sa-埋2016-19	基壇？		完全	
46		笠石Sa-埋2016-20	基壇？		一部欠	
47		笠石？Sa-埋2005-79		笠石？	一部	客土
48		笠石Sa-博			一部欠	
49		笠石Sa-博			一部欠	
50		笠石Sa-博			一部欠	
51		笠石We-埋2016-21	登り高欄		一部欠	奉神門には登り高欄がない
52	地覆石	地覆石Sa-埋2016-22	基壇？		完全	
53		地覆石Sa-埋2016-23	基壇？		完全	K10-92、Ⅱ層
54		地覆石Sx-埋2010-687			一部	
55		地覆石？Sx-埋2013b-861		地覆石？	一部	

Ⅲ-２、戦前大龍柱以前の大龍柱（Sb-美１）――木曳門採集龍柱片の分析

要旨

・木曳門採集の砂岩（ニービヌフニ）製龍柱片（Sb-美 1）について、戦前大龍柱（Sa 型式）と比較検討する。
・Sb-美 1 については、安里（2000）で詳細に報告しているが、その後の情報を加えて整理した。
・戦前大龍柱とは明らかに異なる型式の大龍柱である。
・この龍柱の大きな特徴は、龍柱部材を接合するカスガイ溝周辺を無彫刻のままにしていることである。
・無彫刻部分は Sc 型式にも認められる。全面を彫刻する戦前大龍柱に対し、それ以前の古い大龍柱の大きな特徴といえる。

1）大龍柱 Sb-美 1 の特徴（図１）

・美ら島財団蔵の大龍柱片（**Sb-美 1**）は、首里城木曳門付近から採集された破片である。
・この破片について筆者（安里 2000）は、詳細な実測図を作成・分析して、戦前大龍柱とは別の大龍柱片であることを報告した。
・その分析結果をまとめると下記のようになる。

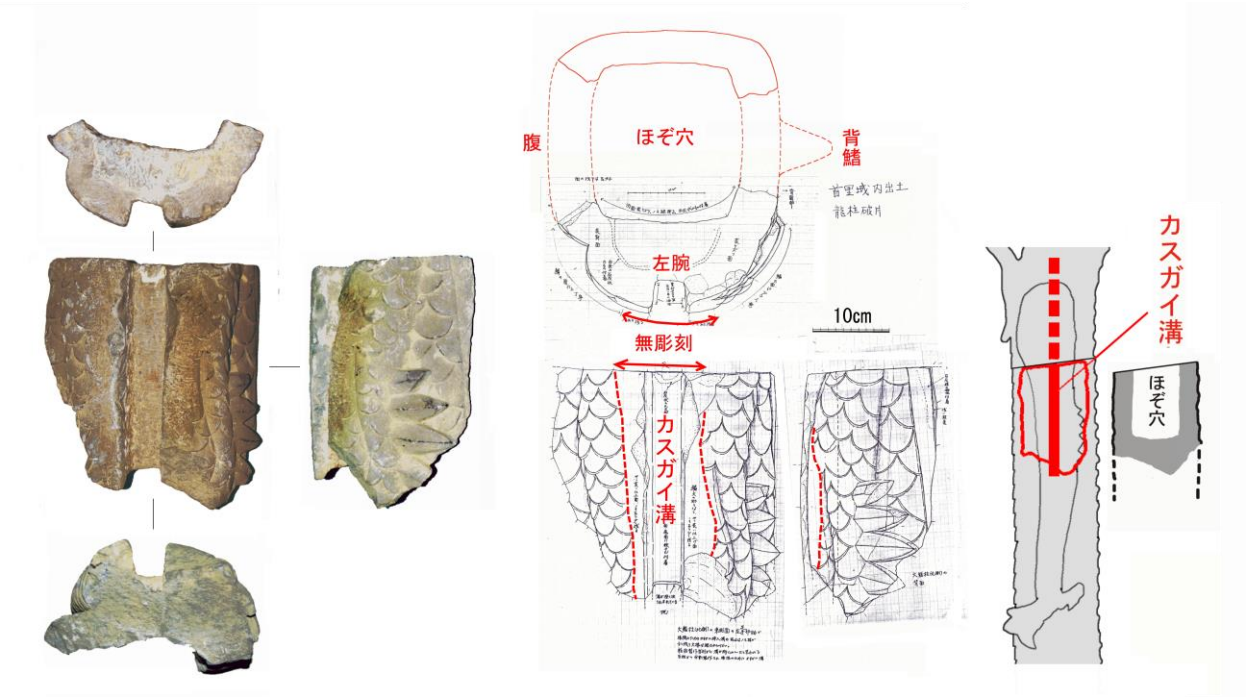


図１：大龍柱 Sb-美 1

・砂岩（ニービヌフニ）製の胴部が縦半分に割れた片方で、下に降ろした左脚の肘部分にあたる。残存高 32.0 ㎝、残存幅 24.2 ㎝。
・戦前の吽形大龍柱が左脚を下に降ろしていることを前提にすると、木曳門採集大龍柱も吽形になる。
・戦前大龍柱に似ているが、ウロコなどの彫刻は彫りが浅く、左肘の鰭の形状が戦前大龍柱と異なる。また、戦前大龍柱（吽形）の同じ左肘部の破片が県博美に収蔵されている（**図２**の **Sa-博 3**）ので、この Sb-美 1 は戦前大龍柱とは全く別物であることは間違いない。
・胴体断面は、約 30 ㎝四方の隅丸方形に復元できる。
・破片の上部は頭部との接合面で、中央のホゾ穴（約 17 ㎝四方。深さは不明）に頭部のホゾを差し込むようになっている。頭部との接合面を石灰で接着していたことが分かる。
・左脚肘部には、鉄カスガイを打ち込む縦溝が彫られていて、ホゾ組みした頭部を幅 3.6 ㎝、推定長 63 ㎝の鉄カスガイで固定し、さらに石灰を塗って補強している。

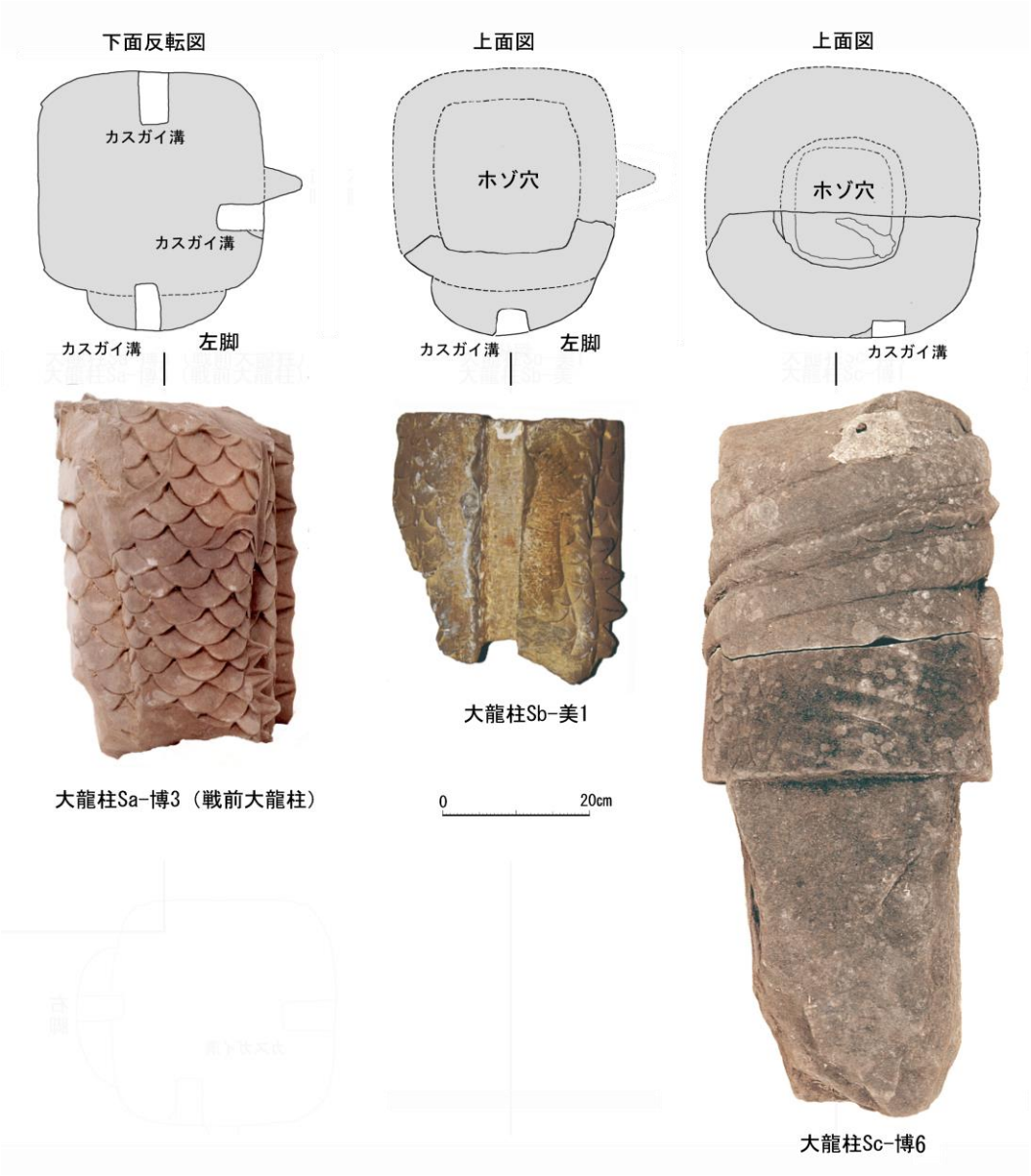


図２：Sb-美 1・Sa-博 3・Sc-博 6 の胴体断面比較

・この遺物の重要な点は、カスガイ溝の周辺部が荒削りのままの「無彫刻」部分になっていることである。つまり、制作当初からカスガイを打ち込む縦溝の周辺を無彫刻にしている。戦前大龍柱が、全面的に彫刻されている点と大きく異なる特徴である。
・Sc 型式の Sc-博 6 でも欄干との接合部分が無彫刻である。無彫刻部分は、戦前大龍柱以前の特徴として位置づけることができる。

2）Sb-美 1・Sa-博 3・Sc-博 6 の胴体・脚肘部の断面比較

・**図 2** は、Sb-美 1・Sa-博 3・Sc-博 6 の断面実測図にもとづく、比較図である。
・**Sb-美 1** の胴部（左脚肘の部分）の断面は、約 30 ㎝四方の隅丸方形に復元できる。
・戦前大龍柱残欠の **Sa-博 3** は、右脚肘部分で胴部の断面は約 31 ㎝四方の隅丸方形で、Sb-美とほぼ同大・同形。**Sc-博 6** の胴部は約 37 ㎝四方でひとまわり大きく全体に丸い。

3）京の内出土の大龍柱片

・県埋文による 1994 年度京の内地区の発掘調査で大龍柱片が出土していたことが、県埋文（2021）のコラムで簡単に紹介されている。
・寸法は不明。
・下に降ろした右脚の肘窩（肘の内側）にあたる部分で、下面が胴体下部との接合面になっている。
・下面からホゾ穴（復元直径は約 26 ㎝と推定されている）が彫られていて、胴体下部と接合するようになっている。
・西村氏は、戦前の阿形大龍柱の破片だと観察しているが、大龍柱古写真の同部位に重ねて比較すると、ウロコの配置などが異なっている。彫りも浅い。
・一方で、コラム掲載図の脚部分の断面形状は、Sb-美 1 とほぼ一致しており、Sb 型式の可能性がある。
・ガラス越しの観察とコラム掲載図からの計測なので、推測の域を出ないが、今後詳細に調査すべき資料である。

引用文献

安里　進 2000「首里城木曳門裏採集の大龍柱残欠」『首里城研究』№5、首里城研究会
沖縄県立埋蔵文化財センター2021「京の内出土の大龍柱の破片」『発掘された倉庫跡』沖縄県埋蔵文化財センター、p.13

Ⅲ-３、正面向き大龍柱残欠（Sc-博 6）の欄干連結状態――ホゾ穴の検討

要旨

・2021.11/15・11/22 に調査した県立博物館・美術館蔵の大龍柱残欠（Sc-博 6）について、1999.6/25 に行った同残欠の調査記録と併せて分析・検討した結果は下記のとおりである。

①Sc-博 6 は、吽形基部（トグロ巻部）の残欠で、背面に石階段の高欄部材に連結するホゾ穴がある。石階段欄干に連結した状態で、敷石上に直にまたは低い台石上に立ち、正面を向いていたと考えられる。

②1768 年の『寸法記』龍柱図（欄干から分離して大きな台石上で自立し向き合う）より古形。儀保親雲上制作（1666 年）龍柱の可能性がある。

③Sc-博 6 と戦前龍柱（Sa）の古写真を比較した結果、戦前龍柱の背面には石階段欄干に連結するホゾ穴がないことを確認した。戦前龍柱は、制作当初から欄干から分離して大きな台石上で自立していたと考えられる。

1）Sc-博 6 の観察（図 1～3）

・Sc-博 6 は、戦後収集されて博物館に保管されてきた大龍柱残欠。

・砂岩（ニービヌフニ）製大龍柱の基部（トグロ巻部）で、根入れがある。縦に真半分に割れた右半分で断面カマボコ形（**図 1・2**）。

・残存長は約 102 ㎝、トグロ巻部は円柱形で、残存長 54 ㎝、残存幅（基部下面 43 ㎝、上面 37 ㎝）。

・上下 2 つに割れている。

・根入れ部は、長さ約 48 ㎝。上部は方形に整形されているが、下半部は粗い剥離による先細りの円柱状。上部方形は、31 ㎝×19 ㎝（残存長）。

・トグロ部上端に**カスガイ溝**（幅 4.5 ㎝、深さ 2.0～2.4 ㎝）がある。石灰で埋めている。

・トグロ部上面の中央に浅いホゾ穴 c（幅 13.0 ㎝、深さ 4.0～5.0 ㎝）がある。石灰が付着している。基部上面には、ノミ跡が残るやや粗い面と丁寧に削られた面がある。破損面を削ったと思われる。

・正面側に尾端がある。尾端の右反り形状から見て吽形と考えられる。

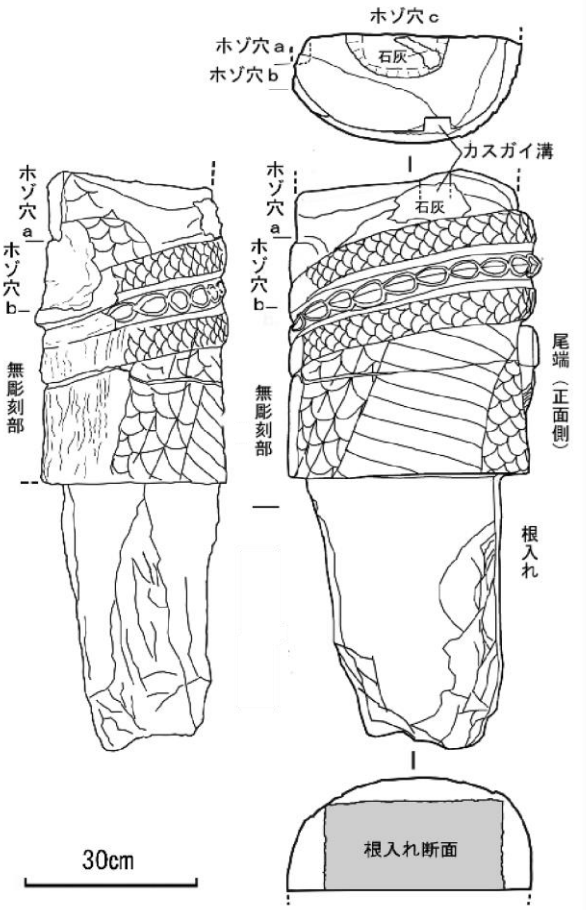


図 1：大龍柱 Sc-博 6　実測図

・彫刻は、全体に浅く線彫り状。腹面ウロコ部の両端は、それぞれ一本の刻線で縁取る。腹面のウロコは縦の長さが 3.2～3.8 ㎝と狭く、長さも一定しない。

・背面の棘条は、2 本の沈線で縁取った中に南瓜種形の棘が連なる。

図２：大龍柱 Sc-博 6

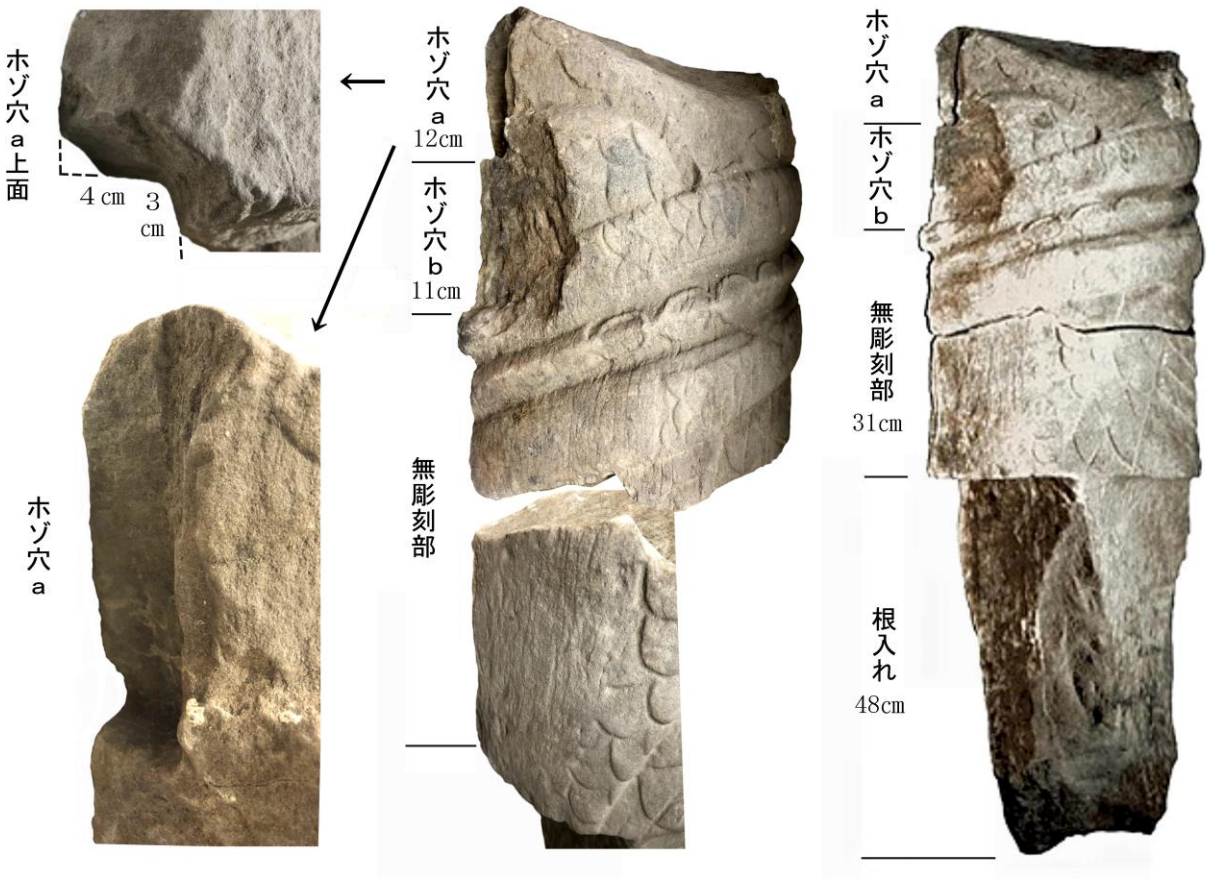


図３：大龍柱 Sc-博 6 背面のホゾ穴と無彫刻部分

・背面側に、2つのホゾ穴と無彫刻部がある。ウロコなどの彫刻はない（**図 3**）
・上側の**ホゾ穴 a** は、断面方形で長方形溝の下部が残存している（残存長約 12 ㎝、残存幅約 4 ㎝、深さ約 3 ㎝）。
・下側の**ホゾ穴 b** は、方形状（縦 11 ㎝、残存幅 10 ㎝）に粗く抉り込んでいる。
・**無彫刻部**は、ノミ跡が残るやや平坦な面（長さ 29 ㎝、残存幅は 14～16 ㎝）。

2）石階段欄干との連結形状の検討

・Sc-博 6 は、尾端の形状（右反り）から見て、吽形と考えられる。
・尾端は戦前龍柱・絵図ともに正面側にある。その反対側が背面になるが、ここにホゾ穴と無彫刻部分がある。
・ホゾ穴と無彫刻部分が背面にあることから、Sc-博 6 は、**石階段欄干と背面で連結して正面を向いていた**ことが分かる。

・ホゾ穴を手がかりに、Sc-博 6 と石階段欄干部材との連結状態を検討した。
・ホゾ穴 a は、形状（断面方形の長方形溝で深さ 3 ㎝、残存幅 4 ㎝）からみて羽目石のホゾにあたる。戦前の基壇親柱・束石の羽目石ホゾ穴（幅約 4 ㎝、深さ約 3 ㎝）と一致する。

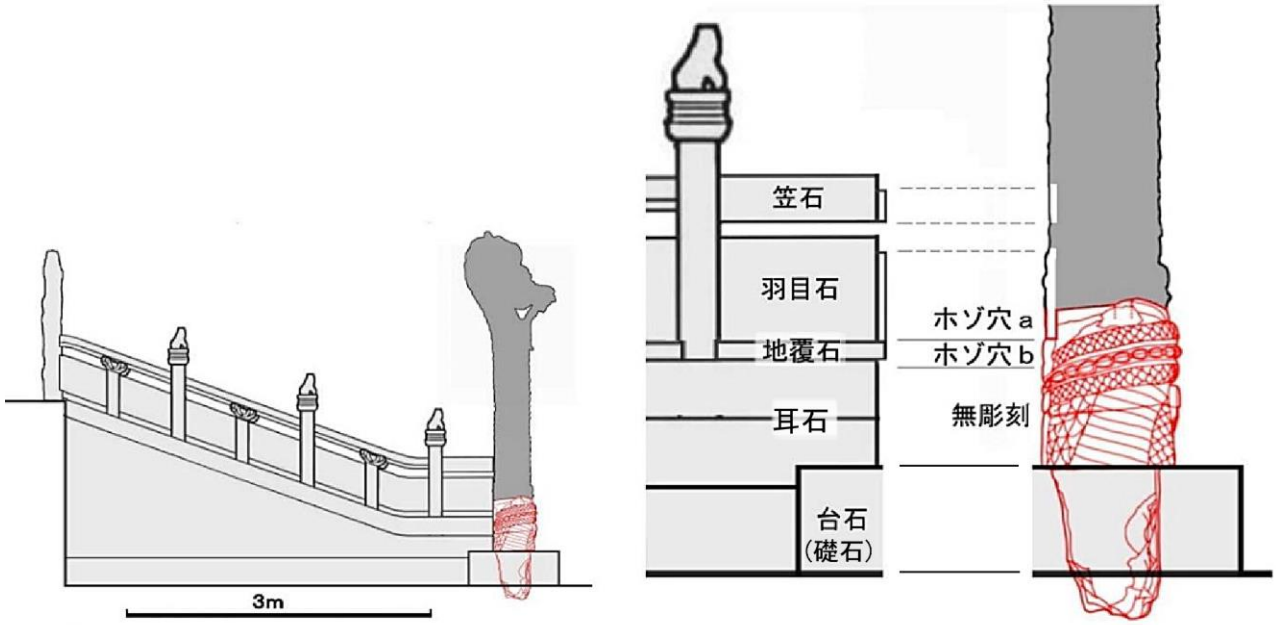


図 4 ：大龍柱 Sc-博 6 のホゾ穴と欄干部材との対応関係
石階段側面図は『沖縄神社拝殿実測図』をトレース（龍柱・獅子など欠損部は補筆した）

・ホゾ穴 b は、方形状の凹み（縦 11 ㎝、残存幅 10 ㎝）からみて、地覆石のホゾ穴にあたる。戦前の基壇地覆石の断面形状（高さ 9.5 ㎝、幅 12～13 ㎝、の方形）と合致する。
・**図 4** の石階段は、「沖縄神社拝殿実測側面図」に欠損部材を補筆したトレース図である。

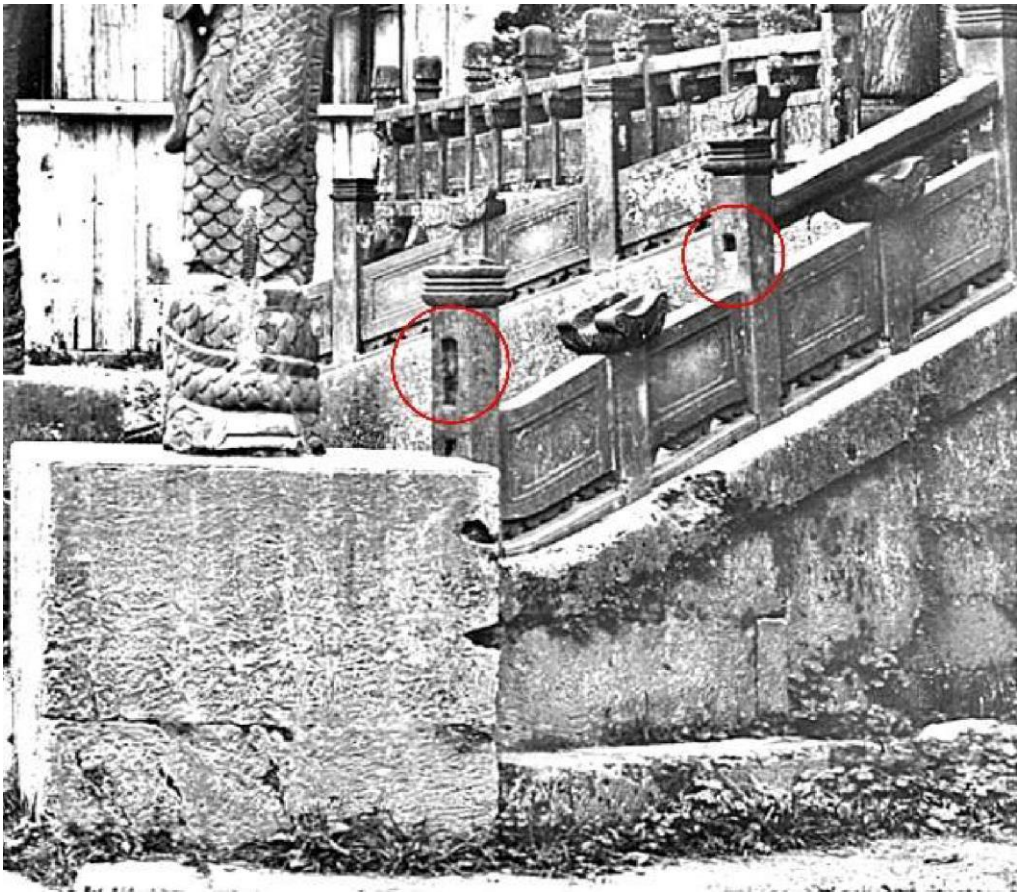


図５：阿形大龍柱と欄干親柱のホゾ穴（○内）

大龍柱側の笠石ホゾ穴が右側親柱の笠石ホゾ穴より長く大きい（写真は沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵）

・古写真の阿形（南側）龍柱側の親柱には、笠石と羽目石のホゾ穴が写っている（**図５**）。
・欄干部材は、大龍柱に連結していた時代の部材を再使用していたことがわかる。西村氏もこの写真を根拠に、欄干と連結した正面向き大龍柱の想像図を作成している。
・また、他の親柱の笠石ホゾ穴も下半分が石灰で埋められており、戦前の石階段親柱が、大龍柱と連結していた時代の部材を再使用したことは間違いない。
・**注意すべき点は、大龍柱側の親柱の笠石ホゾ穴が、他の親柱の笠石ホゾ穴より長く大きいことである。**

・**図４右**に示したように、石階段の羽目石・地覆石と Sc-博６のホゾ穴は、位置的によく対応する。羽目石はホゾ穴ａに、地覆石はホゾ穴ｂに対応する。
・石階段の耳石面には無彫刻部が対応する。Sc-博６の無彫刻部は壁石面に接して隠れるため、彫刻の必要がなかったと考える。

・Sc-博６ホゾ穴と石階段高欄部材を対応させると、Sc-博６の接地面を階段の縁石面より少し高くなる。**大龍柱は縁石上に直に立てられていたのではなく、低い台石（礎石）上に立てられていた可能性があるが、この点は検討の余地がある。**

3）Sc-博 6 の年代と制作者

・安里 2021.6/22 の報告（遺物・残欠の型式分類と編年）で、Sc 型式を、Sa 型式（戦前の龍柱）や Sb 型式より古式と位置づけた。
・上記した Sc-博 6 の観察と分析で、この残欠が、欄干と背面でホゾ組連結して正面を向き、無台石だったことも判明した。

・大龍柱の台石は、1729 年に初めて設置したことが判明している（Ⅱ- 1 ）ので、無台石の Sc-博 6 は 1729 年以前の大龍柱になる。
・また、1768 年『寸法記』の大龍柱図（大きな台石上に立って欄干から自立）よりも古い。
・一方、1701～07 年「首里城古絵図」、1719 年「冊封琉球全図」の龍柱図とは、正面向き無台石という点で合致する。

・1729 年『寸法記』の台石設置以前には、1666 年に儀保為宣が、1711 年に謝敷宗相がそれぞれ大龍柱を再建している。両龍柱とも大きな台石の記載がないので無台石だったことが確認できる。
・Ⅲ- 1 で分析したように、大龍柱遺物の型式編年〈Sc→Sb→Sa（戦前龍柱)〉からみると、Sc-博 6 は儀保為宣制作の大龍柱になる可能性が大きい（Ⅲ- 1 参照)。

Ⅲ-４、「正面説」の親柱と羽目石の組立ては妥当か――西村説の検証

要旨

・西村氏が、「正面説」の物証として提示した石階段の親柱と羽目石の組立て写真を検証した。

・一見すると親柱と羽目石は、うまく噛み合っているように見える。
・この親柱と羽目石の組み立てが妥当かどうかを、発掘調査報告書の正確な実測図で検証した。
・西村氏が提示した親柱と羽目石は、ホゾとホゾ穴のサイズが異なるため、組立てることができない。
・西村氏は、基壇親柱を石階段の大龍柱側の親柱と誤認したうえで、この親柱に石階段の羽目石を組み合わせている。

1）出土遺物の事実誤認がある

・Sc-博 6 の分析結果をふまえて、西村説の根拠の一つを検証した。
・西村氏は、戦前大龍柱が当初は石階段欄干に接続して正面を向いていたとして、想像図を描いている（**図１左**）。
・その物証として、戦前古写真の「龍柱側の親柱」と羽目石の出土遺物の組立て写真を挙げている（**図１右**）。

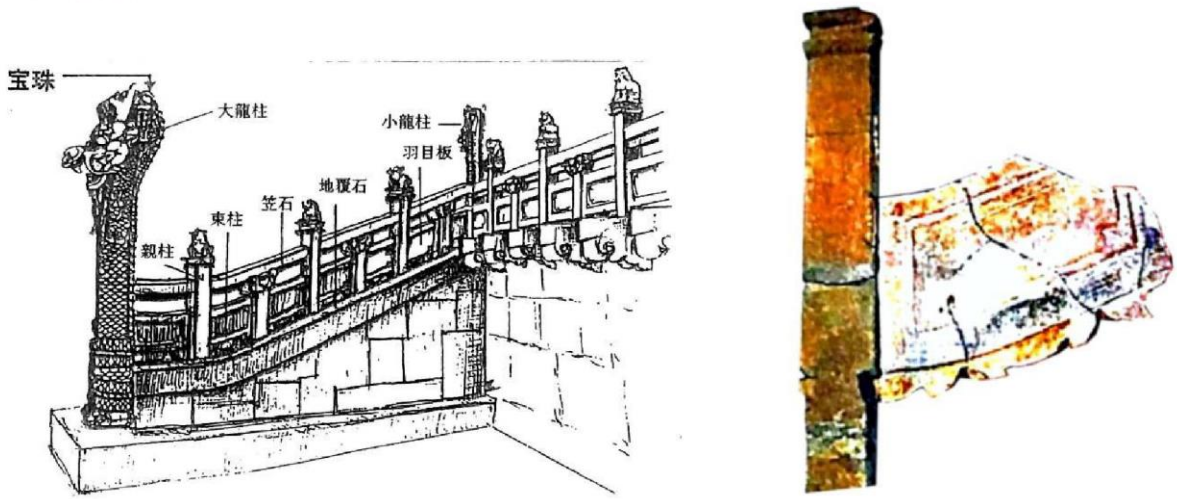


図１：西村氏が描いた正面向き大龍柱想像図と、その物証として提示した親柱と羽目石（西村 2020 より）

・まず、西村氏が物証とする「龍柱側の親柱」と羽目石の組立てが妥当か検証しよう。
・西村氏が掲げた「龍柱側の親柱」写真の遺物は、親柱が県埋文 2016 『首里城跡―正殿地区発掘調査報告書』の 154 図 12（**図２左**の Sa-埋 2016-2）で、羽目石は、152 図-4（**図２中**の Sa-埋 2016-4）である。

・親柱 Sa-埋 2016-2 は、実測図断面をみれば分かるように左右の笠石ホゾ穴は等位置で大きさも同サイズである。これは、基壇の親柱であって石階段の親柱ではない。

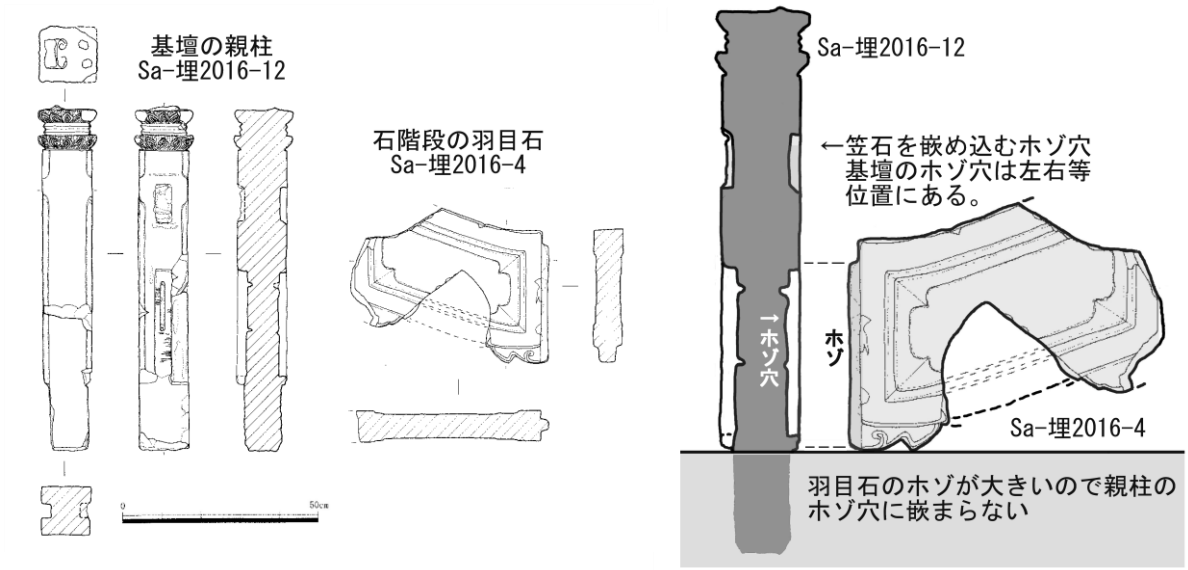


図２：西村氏提示の親柱 Sa-埋 2016-12 と羽目石 Sa-埋 2016-4 の遺物実測図による組立

左の実測図は、『首里城跡　正殿地区発掘調査報告書』の基壇の親柱（Sa-埋 2016-2）と石階段の羽目石（Sa-埋 2016-4)。右は、西村氏の写真に合わせて組立てた親柱と羽目石の実測図。基壇の親柱と石階段の羽目石は、ホゾとホゾ穴の大きさが異なるので嵌め込むことができない。

・石階段の欄干部材は、西村氏の大龍柱想定図（**図１左**）に描かれているように斜めに取り付くので、親柱のホゾ穴は上側と下側で位置がずれる。
・**図３**に見るように、Sa-埋 2016-12 は、大龍柱側親柱とも他の石階段の親柱ともホゾ穴の位置やサイズも異なる。石階段の親柱ではないことは明らかだ。

・西村氏が示した写真では、一見すると親柱と羽目石が組み合うように見えるが、**図２右**に示したように、親柱のホゾ穴と羽目石のホゾのサイズが異なり、羽目石のホゾが大きいので親柱のホゾ穴に嵌め込むことができない。
・これは、石階段の羽目石と基壇の羽目石の大きさが異なるためである（石階段羽目石が大きい、**図４**）。

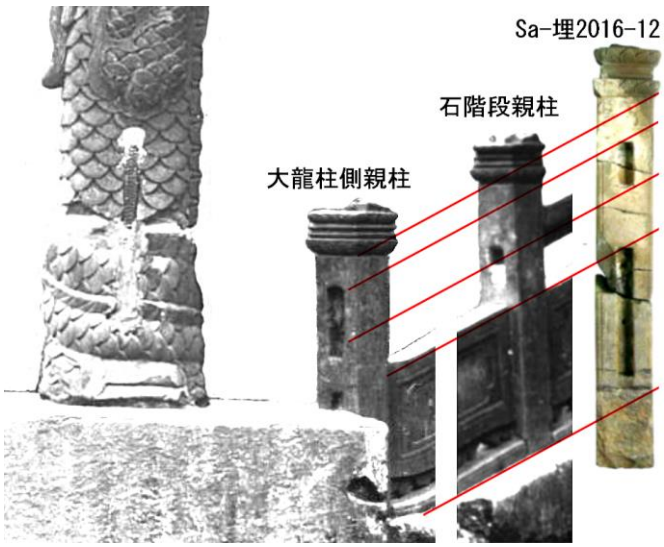


図３：石階段の親柱と欄干親柱 Sa-埋 2016-12 のホゾ穴比較

・重ねて説明しよう。**図４上**は、出土した基壇欄干部材を組立てた図である。基壇床面が水平なので、親柱（Sa-埋 2016-12）と束石のホゾ穴は左右等位置にある。笠石と羽目石のホゾも親柱・束石のホゾ穴とぴたりと嵌まる。
・一方、羽目石 Sa-埋 2016-4 は、湾曲する形状からみて間違いなく石階段の大龍柱側の羽目石である。この形状の羽目石は、石階段の大龍柱側にしか存在しない。
・**図４下**で、石階段羽目石（Sa-埋 2016-4）と基壇欄干の羽目石（Sa-埋 2016-1）のホゾの長さを比較した。石階段と基壇の羽目石は、ホゾのサイズが異なる。石階段羽目石のホゾが長いので、基壇親柱 Sa-埋 2016-12 のホゾ穴に嵌め込むことができない。。
・西村氏は、基壇親柱を石階段の大龍柱側親柱と誤認したうえで、基壇親柱と石階段羽目石という異なる部材を組立てて、大龍柱の正面向きの「物証」だと主張している。

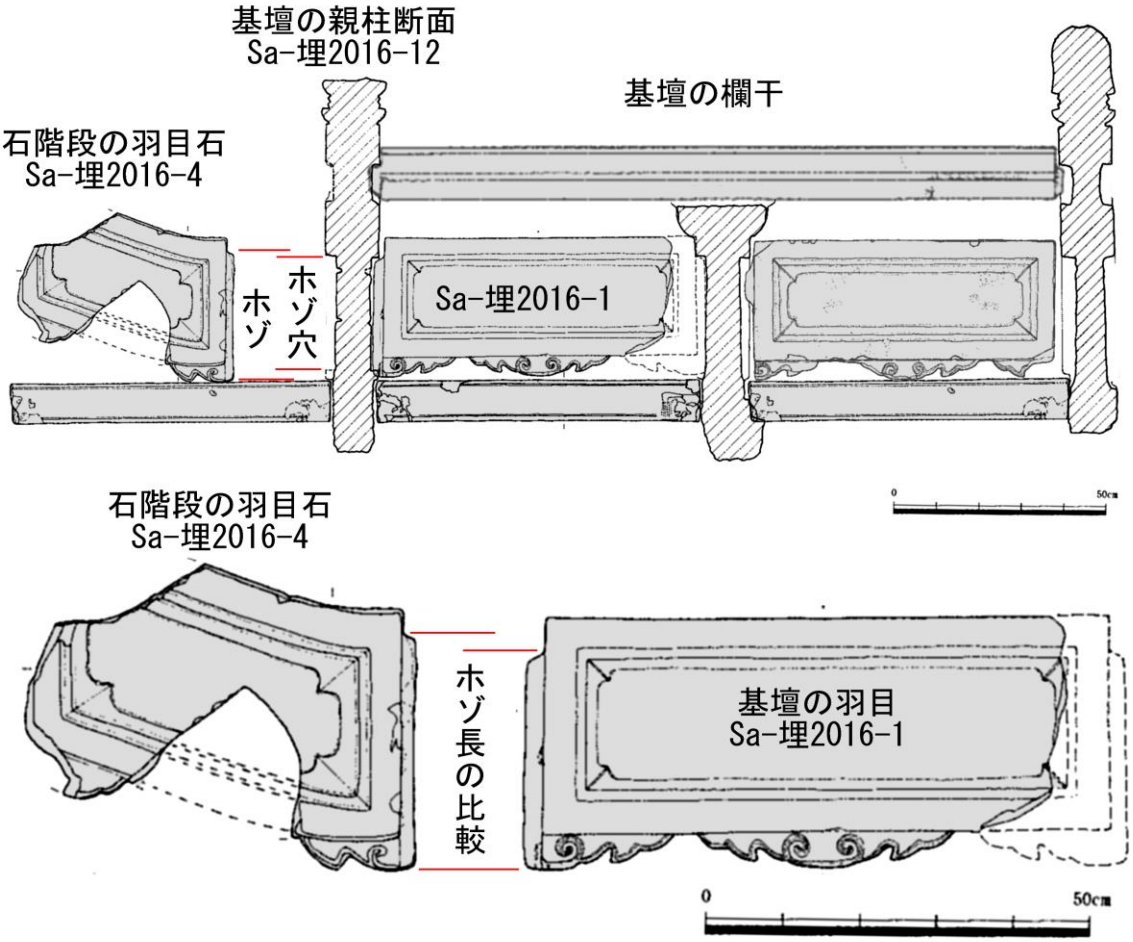


図４：出土遺物で組立てた基壇欄干と石階段の羽目石のホゾとホゾ穴の比較

引用文献

西村貞雄 2020「独自性と大龍柱（下）」沖縄タイムス、9 月 23 日。

Ⅲ-５、戦前大龍柱は欄干に連結していたのか――西村説の検証

要旨

・西村氏は、戦前の大龍柱が、かつては台石がなく石階段欄干に連結して正面を向いていたとして、末広階段の欄干に連結した大龍柱の想像図を描いている（西村 2020）
・その証拠として、石階段親柱に大龍柱と連結する笠石のホゾ穴があることをあげている。

・しかし、大龍柱側親柱のホゾ穴は、戦前大龍柱が欄干と連結していた証明にはならない。
・大龍柱側親柱のホゾ穴は、かつては Sc-博 6 のように大龍柱が石階段欄干に連結して正面を向いていた時代があったことを示しているが、戦前大龍柱も欄干に連結して正面を向いていたことの証明にはならない。

・大龍柱が欄干から分離して大きな台石上で自立した後も、大龍柱側にホゾ穴がある親柱古材をそのまま使用しているからだ（不要になったホゾ穴を石灰で埋めて再使用している）。
・西村氏の想像図が成り立つためには、戦前の大龍柱側にもホゾ穴があったことを証明しなければならない。

・この項では、戦前大龍柱の背面にホゾ穴があった否かを検証した。
・Ⅲ-3 で分析した、無台石で欄干に連結して正面を向いていた大龍柱 Sc-博 6 のホゾ穴と無彫刻部分との比較から、戦前大龍柱には、欄干に連結するホゾ穴は存在しないことが判明した。
・戦前大龍柱は、制作当初から、欄干に連結することなく台石上で自立していた。

1）戦前大龍柱の背面にはホゾ穴がない

・これまで、戦前大龍柱の基部背面を写した古写真はないと考えられてきた。
・『沖縄・昭和 10 年代』には、昭和修理後の阿形大龍柱の背面写真があるが（**図 1**）、この大龍柱背面の基部（トグロ巻部）は、昭和修理前の大龍柱右側面にあたる。ホゾ穴を石灰で埋めたように見える白い補修部分は、右側面にあったカスガイ溝を埋めた補修痕である。
・西村氏（1993：p.86）も指摘しているように、昭和修理では、大龍柱を正面向きから向き合いに変更した際に、頭部胴体と基部の向きをずらして接合している。

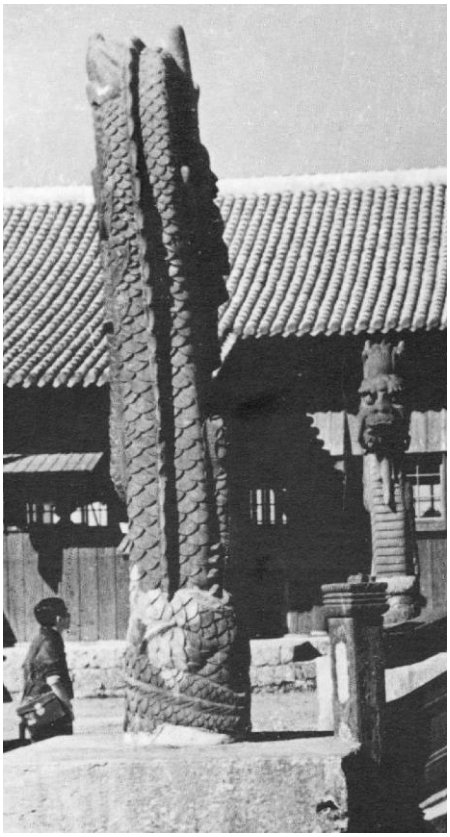


図 1：昭和修理後の大龍柱背面
基部（トグロ巻き）の石灰補修（白い部分）はカスガイ溝の跡。不要になった欄干親柱のホゾ穴も石灰（又はモルタル）で埋めている。

・**Sc-博 6 の分析結果（Ⅲ-４）をふまえると、戦前大龍柱の基部背面にはホゾ穴はなかった**ことが明らかである。
・**図 2** は、古写真から作成した吽形基部のトグロ巻き展開図である。各方向から撮影した写真を接合するとトグロの巻き方が分かる。（昭和修理以後の 2 枚の写真は撮影アングルがほぼ一致するので合成できる。）

図 2：吽形大龍柱のトグロ巻きの展開図
戦前大龍柱の左右側面にカスガイが打ち込まれている。背面にも他の面にもホゾ穴がない。

・龍柱の胴体が、いったん台石下に潜った後に反転して再び台石上に現れた尾部が胴体に巻き付き、尾端が正面で右に巻いて終わる。
・展開図の正面には尾端があり、左側面にはカスガイが打ち込まれ、右側面にはカスガイ溝（カスガイを取り外して石灰またはモルタルで埋めている）がある。

・トグロ巻きの展開図から明らかなように、**昭和修理では頭部胴体の右側面側にトグロ巻部の背面を接合**している（**図 3**）。阿形でも同様なズレがある（安里 2021.8/3 報告）。

・**図 3** で、Sc-博 6 の背面と右側面の写真と、昭和修理以前・以後のトグロ巻部を比較した。古写真の吽形基部の高さは約 58 ㎝、Sc-博 6 は約 54 ㎝でほぼ同じ高さである。
・戦前大龍柱の背面にホゾ穴があるとすれば、トグロ巻き部の背面にホゾ穴や無彫刻部分があるはずだが、それらは存在せず全面に彫刻が施されている。
・図 8 の比較図から、**戦前大龍柱（吽形）のトグロ巻部背面にも各面にも、欄干の羽目石・地覆石を嵌め込むホゾ穴や無彫刻部分が存在しないという事実**が明らかになる。
・西村氏のスケッチでも、地覆石と羽目石は Sc-博 6 のホゾ穴とほぼ同位置で連結しているが、戦前大龍柱のこの部分にホゾ穴は存在しない。
・**戦前大龍柱の出土遺物と残欠をほぼ全て確認したが、ホゾ穴は確認できなかった。**西村氏の想像図にあるような**戦前の大龍柱が欄干に連結して正面を向く状態は、歴史上存在しなかったといえる。**
・欄干とホゾ組で連結した無台石の大龍柱が確認できたのは、1729 年以前の Sc-博 6 だけである。

引用文献

西村貞雄 2020「独自性と大龍柱（下）」沖縄タイムス、9 月 23 日。

図 3：吽形大龍柱の背面（欄干に連結するホゾ穴がない）
昭和修理で、頭部～胴部と基部（トグロ巻）の向きがズレている。トグロ巻き背面には、欄干部材に連結するホゾ穴や無彫刻部分がない。戦前大龍柱は、制作当初から欄干に連結せずに台石上で自立していたことが分かる。

Ⅲ-6　大龍柱のノミ跡を琉球人は見ることができたか
――「ノミ跡丸見え説」の検証

要旨

・正面説が提示する「物証」の一つに、戦前大龍柱の「ノミ跡丸見え説」がある。

・これは當眞嗣一氏（2020）が琉球新報紙上で論じたもので、「頭部のノミ跡丸見えに」の大見出しがある。
・大龍柱が向き合い（横向き）だと、御庭側から頭部の鎌首穴彫刻の「ノミ跡が丸見えとなる」が、正面向きだと御庭側から見えないから大龍柱は正面を向いていたにちがいないという説だ。
・當眞氏が「丸見え」を強調しているので、「ノミ跡丸見え説」と呼ぶことにする。

・「ノミ跡丸見え説」について安里嗣淳氏（2020）は、「ついに『寸法記』を超えた」、「この議論に『決着をつけた』」と強調する。
・「琉球新報」の「社説」（2021）でも、「大龍柱のノミ跡が正面向きを示しているという研究も、検討に値するのではないだろうか」と社を挙げて「ノミ跡丸見え説」を評価している。

・鎌首穴のノミ跡が本当に御庭側から「丸見え」になるのか検証した。
・「丸見え」になったのは、戦災で折れた大龍柱の頭部が、沖縄県立博物館・美術館で常設展示され、現代人の目の高さで鎌首穴の奥にあるノミ跡がのぞき込めるようになったからだ。

・しかし、王国時代琉球人の目には、高さ約４ｍの大龍柱の頭部にある鎌首穴（径約９㎝）のさらに奥にあるノミ跡までは見えなかったはずだ。

1）鎌首穴の観察

・大小龍柱が鎌首をもたげた部分の穴を「鎌首穴」と呼ぶことにする。
・鎌首穴の部分は、吽形（北側龍柱）頭部の残欠が沖縄県立博物館・美術館（県博美）に常設展示され、阿形（南側龍柱）の鎌首穴部分が琉球大学博物館（風樹館）に展示されている。風樹館には、小龍柱吽形の鎌首穴部分も展示されている。

・鎌首穴の彫刻状態を、誰でも観察できる県博美常設展示の吽形大龍柱で説明しよう（**図２**）。
・鎌首穴の大きさは、正殿側が径約 15 ㎝、御庭側が径約９㎝と小さい。御庭側の穴は、宝珠を掴んで上に突き出す右脚に隠れるために小さくなっている。穴の径が大きい正殿側は腹部ウロコを丁寧に彫刻しているが、御庭側はノミ跡のままである。
・径が大きい正殿側は丁寧に彫刻できたが、御庭側は穴が狭いために彫刻が困難でノミ跡が残ったと考えられる。

・鎌首穴は、私たちの目の位置で観察できるが、それでものぞき込まないと穴の奥にあるノミ跡は確認できない。

大龍柱吽形御庭側面

御庭側の鎌首穴

正殿側の鎌首穴（奥は御庭側の穴）

図２：戦前大龍柱吽形の鎌首穴

２）琉球王国時代の大龍柱の高さと琉球人の身長

・では、琉球王国時代の琉球人にも、鎌首穴は「丸見え」だったのだろうか。

・**図１**は、高さ約 1m余の台石に立つ高さ約 3m余の大龍柱を見上げる琉球人のイラストである。鎌首穴は高さ約 4mの位置にある。

・鎌首穴の位置は、大龍柱が向き合いの場合、御庭側が小さく約 9㎝である。

・琉球人の身長は 155.6 ㎝。これは陵墓の玉陵に葬られた王族男性の平均身長（佐野 1977：p.83）である。

・想像してほしい。貴方は 4 m上にある径 9 ㎝ほどの穴の奥にあるノミ跡を確認することができるだろうか？少なくとも当時の琉球人には、大龍柱によじ登らない限り鎌首穴のノミ跡を見ることができなかったはずだ。

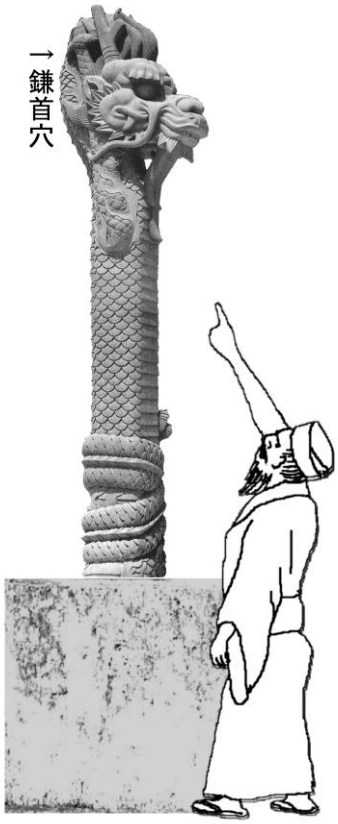


図１：大龍柱の鎌首穴を見上げる琉球人

鎌首穴は高さ約 4m。琉球人の身長は 155.6 ㎝。彼には、鎌首穴の奥にあるノミ跡は見えない。

３）横向き小龍柱の鎌首穴

・鎌首穴は、向き合いで立つ小龍柱にもある。

・小龍柱の高さは昭和修理の「拝殿図」にもとづくと約 133 ㎝で、唐玻豊前の石階段を登ったところに向き合いで立っている。

・石階段は、国王冊封儀礼の際に、国王と冊封使がこれを上って小龍柱の前を通って正殿に入る特別な階段だ。

・**図３**では、国王や冊封使のイラストを描くのは手間がかかるので、問題はあるが先の琉球人を小龍柱の前に立たせた。

・彼の目の位置で鎌首穴を楽に見ることができる。のぞき込めば、奥にあるノミ跡も見ることができるだろう。
・当然国王や冊封使も見ることができるが、それでも小龍柱は横向きだ。
・鎌首穴のノミ跡が御庭に集う臣下から見えないようにするために大龍柱を正面に向けたという「ノミ跡丸見え説」とは矛盾する。
・鎌首穴のノミ跡を、正面向きの証拠とするのは無理がある。

図３：向き合う小龍柱の鎌首穴を見る琉球人

小龍柱は高さ 133 ㎝。鎌首穴は 155.5 ㎝の琉球人でもでも楽に見ることができる。のぞき込めばノミ跡も見ることができただろう。

引用文献

安里嗣淳 2020「復元の教訓」主体性回復への道　首里城再建を考える 7、琉球新報 11 月 18 日。
佐野　一 1977「玉陵の人骨について」『重要文化財玉陵復原修理工事報告書』重要文化財玉陵復原修理委員会。
當眞嗣一 2020「遺物が語る」主体性回復への道　首里城再建を考える 6、琉球新報 10 月 31 日。
琉球新報 2021「社説」琉球新報 12 月 4 日。

Ⅳ　絵図による検証

Ⅳ-１、絵図による検証の基礎作業――正殿と大龍柱を描いた絵図の集成と分析

論旨

・大龍柱は、石階段欄干に連結するか（台石はない）、台石上で自立しているかのどちらかである。「向き」も正面向きか、向き合いかのどちらかだ。
・18～19 世紀の絵図に描かれた大龍柱の形状は、台石と向きの組み合わせでみると、
Ａ：無台石で正面向き、Ｂ：台石上で向き合う、Ｃ：台石上で正面向き、の３パターンがある。

・３パターンを絵図の年代順に整理すると、Ａ→Ｂ→Ｃへと変遷している。
・1719～20 年以前がＡパターン、1768～1855 年がＢパターン、1860～75 年以後がＣパターンになる。

・西村氏が主張する龍柱の形状はＡパターン、1768 年『寸法記』はＢパターン、1875 年のルヴェルテガ古写真（台石上で正面向き）はＣパターンである。

・Ｃパターンの大龍柱は、1860 年以前の絵図には全く描かれていない。Ｂパターン（台石上で向き合う）大龍柱が、王国末期に変更されてＣパターン（台石上で正面向き）となり、1875 年のルヴェルテガの撮影に至ったと考えられる。

１）首里城を描いた絵図の集成

・首里城正殿は、時代とともにその姿を変えてきた。17 世紀以前の情報は少ないが、近世期の 18 世紀以後は多くの絵図に描かれるようになる。
・**表１**に、正殿と大龍柱に関する情報を描いた 18 世紀～明治期の絵図 36 点を取り上げた。現在確認できた正殿と大龍柱を描いた絵図の殆どを網羅したと考えている。

２）ここで取り上げる絵図情報の意味

・**表１**に、それぞれの絵図について下記 12 の要素をピックアップした。

①王府絵図か民間絵図か、	②制作年代または景観年代、	③唐玻豊の形状、
④正面の石階段の形状、	⑤大龍柱台石の有無	⑥龍柱の向き、
⑦外壁の色、	⑧屋根の色、	⑨奉神門の型式、
⑩広福門の型式、	⑪瑞泉門前の獅子の向き、	⑫歓会門前の獅子の向き

・これらの要素を取り上げた理由は、**大龍柱の変遷を正殿全体の変遷の一つとして捉えるため**だ。
・大龍柱は、龍柱本体だけで存在しているのではない。正殿を構成する一部である。
・また、王権の象徴として正殿を装飾する龍図像の一つというだけでなく、同じく王権を象徴する高い基壇の一部でもある。

３）石階段欄干と大龍柱・台石の一体構造

・特に基壇に取り付く正面石階段と大龍柱は構造的に一体である。
・石階段は約 25 度の勾配で正殿基壇に取り付いている。この勾配の上に砂岩製の親柱 3 本・束石 3 本・羽目石 6 個・笠石 3 本が組み合って欄干を構成する。大龍柱が欄干に連結していた時期には、笠石 1 本と羽目石 1 個、地覆石 1 本がさらに加わっていた。
・これらの石材が約 25 度の勾配で石階段に取り付くと、加重は下方へ加わる。これを親柱と束石が支える構造だが最下端の親柱に最も加重がかかる。大龍柱が欄干に連結している時期には、大龍柱が欄干を支える大親柱の機能を果たしていたと考えられる。
・大龍柱を欄干から分離して台石上に立てた場合でも、台石に欄干の親柱を食い込ませて欄干を安定させる必要があった（**図 1**）。

・大龍柱の向きは、欄干との連結関係や台石の有無を含めた**大龍柱の「形状（かたち）」**を構成する要素

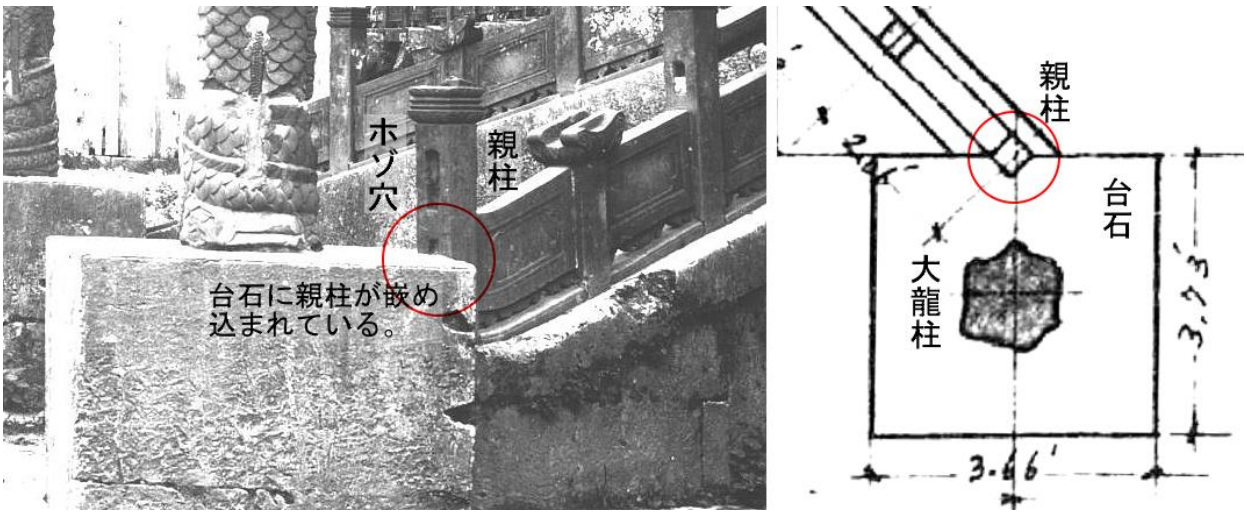


図 1：台石と欄干の構造

欄干親柱には、大龍柱に連結していた時期のホゾ穴がある。台石設置以後は欄干親柱を台石に嵌め込んで欄干を支えている。左写真は鎌倉芳太郎撮影古写真（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵）。右は「沖縄神社拝殿実測図」の台石部分（文化庁蔵）

の一つである。**大龍柱の向きだけを取り出して議論すると、「木を見て森を見ず」になりかねない。**
・また、古文書を扱う場合には、そのなかに記された情報が信頼に足るかどうか検証する作業（史料批判）がある。同様に、**絵図も史料批判をする必要がある**。その一つが、絵図のなかに描かれた景観に矛盾がないか（例えば同時期に存在しえないものが描かれていないか）をチェックする方法だ。
・また、王府の絵図か民間の絵図かどうかも、絵図の信頼度を判断する大きな要素になる。

・龍柱の向きとともに議論がある正殿の屋根瓦の色（**灰色瓦か赤瓦か**）と外壁の色（**黒壁か赤壁か**）のほか、龍柱の向きと関連すると思われる**瑞泉門前の獅子と歓会門前の獅子の向き**についてもチェックした。
・絵図に描かれた正殿外壁の色と屋根瓦の分析は、別項で取り上げる。

3）王府絵図と民間絵図――信頼度の差

・正殿を描いた絵図には、王府の絵師が業務遂行のために描いた王府絵図と、民間の絵師が描いた民間絵図（王府の絵師が私的に描いた絵図も含む）がある。

・これまで、王府絵図と民間絵図を区別せずに扱ってきた。しかし、この二つの絵図は、描かれた情報の信頼度において大きな差がある。

・例えば、王府絵図には次の種類がある。正殿の解体修理のための建築図（『寸法記』）、重要な儀式を執り行うイベント会場図面（『図帳勢頭帳』・『冠船之時御座構之図』）、冊封儀礼の記録画（『正殿前城元仲秋宴設営絵図』）、王府の重要施設の図面（「首里城古絵図」）、地域行政上必要な図面（「首里古地図」）など。**王府絵図は、業務遂行のために制作した絵図という性格上、信頼度は高い**。

・一方、民間絵図は、多くが商品として制作したもので、首里那覇鳥瞰図や首里城鳥瞰図などがある。これら**民間絵図は、古い時代の正殿を模写したものや、デフォルメを加えた正殿図などが描かれており、その取扱いには注意が必要**だ。

・首里城を描いた絵図を扱う場合、両者を区別しないと、情報が矛盾する絵図の中から自説に都合の良い絵図だけを見て判断を誤ることになる。

＊以上については引用文献に掲げた、安里 2019a「首里那覇鳥瞰図の年代設定と描かれた景観の虚実」、安里 2019b「描かれた首里城正殿の虚実」『沖縄県史　図説編　前近代』を参照していただきたい。

4）制作年代と景観年代

・**表１（文末に掲示）**では、首里城を描いた絵図を、王府関係絵図と民間絵図に分けて年代順に配列した。王府関係絵図には、清国から来琉した冊封使節の絵師が描いた風景画も、便宜的に王府絵図といっしょに並べてある。

・王府関係絵図には**制作年代**が記された絵図が多く、大抵はその時点の実際の景観を描いている。

・一方、民間絵図は、多くが制作年代不明である。その場合は、絵図に描かれた施設などの年代で判断する。これを**景観年代**という。民間絵図では、古い絵図を模写したり、模写した古い絵図に新たな情報を書き加えたりするので、古い景観と新しい景観が混在するという年代的な矛盾が生ずることが多い。その場合は、景観が新しい方（制作年代に近い景観年代の下限）を景観年代とした。

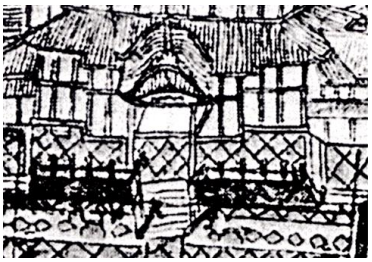
＊「城元正殿前仲秋宴設営絵図」と伝呉著仁「首里那覇全景図屏風」の年代については、別項で論じる。

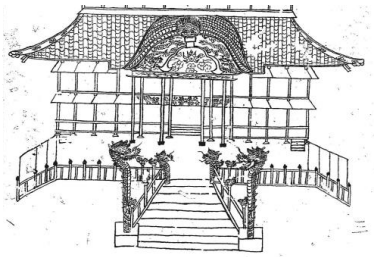
5）正殿の唐玻豊と石階段

・正殿は時代とともに形を変えた。その代表例が正殿正面の唐玻豊（唐破風）と正面の石階段である。

・唐玻豊は、「唐」とあるが日本独自の建築様式で、中国様式の首里城正殿に 17 世紀に新たに付け加えられた。当初は、**柱間１間**（柱と柱の間を１間と数える）で小さかったが、後に**柱間３間**の大唐玻豊に変わる。唐玻豊の正面に取り付く石階段も、当初は基壇に真っ直ぐに取り付く**直線階段**だったが、後に、ハの字形の**末広階段**に変わる。

・唐玻豊と石階段は、1701－07 年「首里城古絵図」では〈柱間１間唐破風・直線階段〉で、1768 年『寸法記』以後は〈柱間３間唐破風・末広階段〉である（**図２**）。





左：柱間１間唐玻豊と直線階段
（「首里城古絵図」）

右：柱間３間唐玻豊と末広階段
（『寸法記』沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵）

図２：唐玻豊と石階段

6）大龍柱の台石と「向き」、石階段欄干との関係

・大龍柱は、石階段の欄干と構造的に組み合っているが、その形状には２つある。

①大龍柱を石階段の欄干に連結して欄干を支える親柱の機能を持たせる（台石はない）

②大龍柱を欄干から分離して大きな台石上で自立させる（この場合、台石が欄干を支えている）

・大龍柱の**台石は、1729 年に設置した史料がある**（比嘉景常 1940）ので、大龍柱の変遷を絵図から考えるうえで、台石が描かれているかが重要なポイントになる。

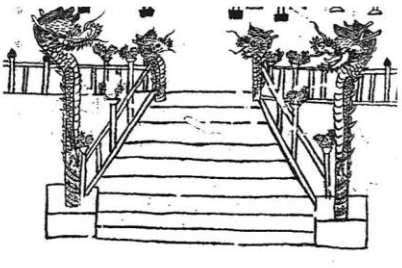
・大龍柱と欄干の連結状態は、絵図では連結部分が大龍柱に隠れるため判断が難しい。大龍柱台石を設置すると、**図１**に見るように構造的に大龍柱と欄干の連結は不可能になるので、台石の有無で大龍柱と欄干の連結の有無を判断できる。

7）大龍柱の形状パターンの変化

・絵図に描かれた大龍柱の「形状」には、次の３パターンがある。

Ａパターン：無台石で正面向き　Ｂパターン：台石上で向き合う　Ｃパターン：台石上で正面向き

Ａパターン
無台石で正面向き



Ｂパターン
台石上で向き合う

Ｃパターン
台石上で正面向き

図３：大龍柱の形状パターン

・**表２に**、表１から大龍柱関係要素を取り出して色分け表示した。

・比較分析のために、民間絵図の欄に、1875 年ルヴェルテガ古写真を加えてある。

表２：首里城正殿・大龍柱を描いた絵図集成

分類	No.	絵図名称	製作年代 ＊印は景観年代	唐破風	石階段	大龍柱の形状		
						パターン	台石	向き
王府関係絵図	1	首里城古絵図	1701-07*	1間	直線	A	無	正面
	2	冊封中山王図	1719-20	1間	直線	A	無	正面
	3	冊封儀注圖	1719-20	1間	直線	A	無	正面
	4	中秋宴図(『冊封琉球全図』)	1719-20	1間	直線	A	無	正面
	5	首里古地図／古写真・模写図	1729-32*	1間	直線カ		－	－
	6	首里城正殿図／『寸法記』	1768	3間	末広	B	有	向合い
	7	正殿前城元設営図／古写真	1838	3間	末広	B	有	向合い
	8	正殿前城元仲秋宴設営絵図／古写真	1838	3間	末広	B	有	向合い
	9	百浦添御普請絵図帳／「尚家文書」	1846	3間	末広	B	有	向合い
	10	図帳勢頭方	18c末～19c前半	3間	末広		有	－
	11	図帳当方	18c末～19c前半	3間	末広		有	－
	12	冠船之時御座構之図	1866	3間	末広		有	－
民間絵図	13	琉球首里ノ図	17末-19初期	3間	直線		－	－
	14	首里那覇泊全景図／古写真	1803-37*	3間	?		－	－
	15	首里那覇港図屏風	1803-？*	1間	直線	A	無	正面
	16	首里城図／石洞美術館蔵	1808-38*	3間	末広	B	有	向合い
	17	琉球交易港図屏風	1835-44*	?	?		無	?
	18	琉球貿易図屏風	1835-44*	?	?		無	?
	19	首里那覇鳥瞰図／伊江家旧蔵	1803-79*	1間	直線		－	－
	20	首里那覇鳥瞰図／県公文書館蔵	1858-79*	3間	直線		無	?
	21	首里城図／友寄喜恒画	1860-79*	1間	直線	C	有	正面
	22	首里那覇全景図屏風／古写真	1873-79*	1間	直線	A	無	正面
	*	ルヴェルテガ古写真	1875	3間	末広	C	有	正面
	23	首里那覇古繪地圖	1876-79*	3間	?		無	向合い
	24	首里那覇鳥瞰図屏風／那覇市歴博蔵	1876-79*	3間	直線		無	向合い
	25	首里那覇図	1876-79*	3間	直線		無	向合い
	26	首里城図／『沖縄志』	1877	1間	直線		－	?
	27	沖縄県琉球国旧城図	1879-86*	1間	末広	C	有	正面
	28	首里城周辺の図	1883-85*	1間	直線	C	有	正面
	29	首里那覇鳥瞰図／県立博物館・美術館蔵	1891-93*	3間	?		無	?
	30	首里那覇鳥瞰図／(一財)美ら島財団蔵	1891-93*	1間	?	?	無	向合い
	31	自首里王城至那覇港之図	1891-93*	1間	?		無	正面？
	32	首里旧城之図／沖縄県立博物館・美術館蔵	1891-94	3間	末広	B	有	向合い
	33	沖縄首里城図／県公文書館蔵	1891-96*	3間	直線	C	有	正面
	34	沖縄首里城図／県博物館・美術館蔵	1891-96*	3間	直線	C	有	正面
	35	首里城図／『琉球風俗図』	1891-96*	1間	直線	C	有	正面

・表２の王府関係絵図から。**Ａパターンから Ｂパターンに変化**したことが分かる。
・1701-07 年「首里城古絵図」～1719-20 年「仲秋宴図」（『冊封琉球全図』）の間は、Ａパターンの〈無台石で正面向き〉。
・1768 年『寸法記』～1846 年『御普請絵図帳』の間はＢパターンの〈台石上で向き合う〉
・Ａパターン→Ｂパターンの変化は、唐玻豊と石階段の変化（柱間１間唐破風・直線階段→柱間３間唐破風・末広階段）とも矛盾なく整合している。
・Ｃパターンは、王府絵図では 1846 年まで、その存在を確認することができない。

・一方、民間絵図には、18 世紀末以後から明治 20 年代の正殿を描いた絵図があるが、大龍柱の形状パターンには時間的変遷上の脈絡がない。唐玻豊と石階段も同様である。
・台石が 1729 年に設置された事実からみても、1729 年以後も台石のない大龍柱が描かれ続けている。また、1768 年『寸法記』以後は存在しないはずの柱間１間唐破風と直線石階段も描かれ続けている。
・民間絵図が実際の正殿とは異なる正殿を描くという矛盾は、民間絵図が古い絵図を模写する傾向や、これに新しい情報を描き加えたりデフォルメを加えたりすることから生じている（安里 2019a・2019b）

８）ルヴェルテガ写真の大龍柱形状（Ｃパターン）の登場時期

・民間絵図が信憑性に欠けるとはいえ、王府絵図にはない王国末期以降の重要な情報が描かれている。
・大龍柱形状のＣパターンは、王国末期 1875 年のルヴェルテガ写真に写された大龍柱の形状でもある。
・Ｃパターン（台石上で正面向き）は、西村氏が「本来の形」と主張する大龍柱の形状とは異なることも確認しておきたい。
・西村氏は「末広がりの階段の両袖の欄干につながれて［台石がなく＊安里注］**正面向きにあることで大龍柱としての存在の意義があり」（西村 2020a）と述べている。**
・西村氏が〈本来の形〉だという大龍柱は、形状としてはＡパターンだが、表２の絵図集成で分かるように、Ａパターンの大龍柱が末広階段に連結した絵図は１枚も確認できなかった。

図４：ルヴェルテガ古写真の大龍柱形状（Ｃパターン）
エルヴェ・ ベルナール氏（在フランス）所蔵

・Ｃパターンについて、**表２**から次の３つの事実が指摘できる。
①1846 年以前の絵図には描かれていない。
②1860～79 年の絵図や 1875 年ルヴェルテガ古写真で初めて確認できる。
③その後、王国末期から明治期の絵図に多く描かれている。
・これらの事実から、ルヴェルテガ古写真のＣパターン大龍柱は、1846 年～1875 年の 29 年間に登場したと考えられる。また、1768 年『寸法記』～1846 年「御普請絵図帳」が作成された時期には存在し

ていなかったことも分かる。

引用文献

安里　進 2019a「首里那覇鳥瞰図の年代設定と描かれた景観の虚実」『近世城下絵図の景観分析・ＧＩＳ分析』平井松午編、古今書院。

安里　進 2019b「描かれた首里城正殿の虚実」『沖縄県史　図説編　前近代』沖縄県教育委員会。

西村 2020a「首里城再建を考える―独自性と大龍柱（下）」「沖縄タイムス」9 月 22 日。

比嘉景常 1940「首里城正殿の大龍柱に就いて」（一～三）「琉球新報」1 月 1 日、5 日、6 日。

表１：首里城正殿・大龍柱を描いた絵図集成　　＊絵図の年代は安里2019「首里那覇鳥瞰図の年代設定と描かれた景観の虚実」参照

分類	No.	絵図名称	製作年代 ＊は景観年代の下限	唐破風	石階段	台石	向き	瑞泉門獅子(体部の向き)	歓会門獅子(体部の向き)	屋根瓦の色	正殿外壁の色	製作・編集者	所蔵機関・掲載図書	備考
王府関係絵図	1	首里城古絵図	1701-07*	1間	直線	無	正面	?	?	?	?	首里王府	個人蔵	
	2	冊封中山王図	1719-20	1間	直線	無	正面	−	−	−	−	冊封使節絵師	『中山伝信録』	
	3	冊封儀注圖	1719-20	1間	直線	無	正面	−	−	灰	−	冊封使節絵師	『冊封琉球全図』（北京故宮博物院蔵）	№6首里古地図の年代と石階段の形状は検討の余地あり
	4	中秋宴図	1719-20	1間	直線	無	正面	−	−	灰	−	冊封使節絵師	『冊封琉球全図』（北京故宮博物院蔵）	
	5	首里古地図／古写真・模写図	1729-32*	1間	直線ヵ	−	−	−	向合い	紺	赤	原図は首里王府	沖縄県立図書館蔵	
	6	首里城正殿図／『寸法記』	1768	3間	末広	有	向合い	−	−	−	−	首里王府	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	7	正殿前城元設営図／古写真	1838	3間	末広	有	向合い	−	−	?	?	首里王府	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	8	正殿前城元仲秋宴設営絵図／古写真	1838	3間	末広	有	向合い	−	−	?	?	首里王府	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	9	百浦添御普請絵図帳／「尚家文書」	1846	3間	末広	有	向合い	−	−	−	−	首里王府	那覇市歴史博物館蔵	
	10	図帳勢頭方・図帳当方	18c末～19c前半	3間	末広	有	−	−	−	−	−	首里王府	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	11	図帳勢頭方・図帳当方	18c末～19c前半	3間	末広	有	−	−	−	−	−	首里王府	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	12	冠船之時御座構之図	1866	3間	末広	有	−	−	正面	−	−	首里王府	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
民間絵図	13	琉球首里ノ図	17末-18初頭	1間	直線	ー	−	−	−	−	−		古河歴史博物館蔵（鷹見泉石資料）	
	14	首里那覇泊全景図／古写真	1803-37*	3間	?	−	ー	?	向合い	?	?	慎克熙	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	15	首里那覇港図屏風	1803-？*	1間	直線	無	正面・	向合い	向合い	茶/灰	黒		沖縄県立博物館･美術館蔵	
	16	首里城図／石洞美術館蔵	1808-51*	3間	末広	有	向合い	向合い	向合い	茶/赤	黒		石洞美術館蔵	
	17	琉球交易港図屏風	1835-44*	?	?	無	?	−	向合い	茶	黒/白		浦添市美術館蔵	
	18	琉球貿易図屏風	1835-44*	?	?	無	?	−	向合い	茶	黒/白		滋賀大学経済学部附属史料館蔵	
	19	首里那覇鳥瞰図／伊江家旧蔵	1803-79*	1間	直線	−	−	向合い	向合い	灰	黒		那覇市歴史博物館蔵	
	20	首里那覇鳥瞰図／県公文書館蔵	1858-79*	3間	直線	無	?	−	正面	?	白	善秀(阿嘉宗教)	沖縄県公文書館蔵	
	21	首里城図／友寄喜画	1860-79*	1間	直線	有	正面	?	正面	茶	黒	友寄喜恒	沖縄県立図書館蔵	
	22	首里那覇全景図屏風／古写真	1873-79*	1間	直線	無	正面	−	正面	?	?	伝呉著仁	沖縄県立芸術大学附属図書･芸術資料館蔵（鎌倉資料）	
	23	首里那覇古繪地圖	1876-79*	3間	?	無	向合い	−	正面	茶	黒/白	善秀(阿嘉宗教)	立正大学熊谷図書館蔵(田中啓爾文庫)	
	24	首里那覇鳥瞰図屏風／那覇市歴博蔵	1876-79*	3間	直線	無	向合い	−	正面	赤茶	白	善秀(阿嘉宗教)	那覇市歴史博物館蔵	
	25	首里那覇図	1876-79*	3間	直線	無	向合い	−	正面	赤茶	白	善秀(阿嘉宗教)	沖縄県立図書館蔵	
	26	首里城図／『沖縄志』掲載	1877	1間	直線	−	?	−	?	−	−		『沖縄志』掲載図	
	27	沖縄県琉球国旧城図	1879-86*	1間	末広	有	正面	向合い	向合い	茶	黒		『琉球風俗図巻』(九州国立博物館蔵)	
	28	首里城周辺の図	1883-85*	1間	直線	有	正面	向合い	向合い	茶	白	麻有信	一般財団法人沖縄美ら島財団蔵	
	29	首里那覇鳥瞰図／県立博物館・美術館蔵	1891-93*	3間	?	無	?	−	正面	茶	黒/白	阿嘉宗教	沖縄県立博物館･美術館蔵	
	30	首里那覇鳥瞰図／(一財)美ら島財団蔵	1891-93*	1間	?	無	向合い	−	正面	赤/灰	黒/白	阿嘉宗教	一般財団法人沖縄美ら島財団蔵	
	31	自首里王城至那覇港之図	1891-93*	1間	?	無	正面？	正面	正面	赤/灰	黒/赤	阿嘉宗教	九州国立博物館蔵	
	32	首里旧城之図／沖縄県立博物館・美術館蔵	1891-94	3間	末広	有	向合い	向合い	向合い	茶	黒	査丕烈	沖縄県立博物館･美術館蔵	
	33	沖縄首里城図／県公文書館蔵	1891-96*	3間	直線	有	正面	向合い	向合い	灰	茶		沖縄県公文書館蔵	
	34	沖縄首里城図／県博物館・美術館蔵	1891-96*	3間	直線	有	正面	向合い	向合い	灰	?		沖縄県立博物館･美術館蔵	
	35	首里城図／『琉球風俗図』	1891-96*	1間	直線	有	正面	正面	向合い	茶	茶		『琉球風俗図』2楫(国立国会図書館蔵)	

Ⅳ-２　『寸法記』大龍柱図の珠取前脚――逆描画の検証

論旨

・『寸法記』の大龍柱図は、不正確で信頼性に欠けるという主張がある。
・戦前の大龍柱（昭和修理以前）は「珠取双龍」の構図で、正面を向く龍が前脚を上に挙げて宝珠を掴んでいる。宝珠を掴む前脚は、阿形龍柱が左脚、吽形龍柱が右脚である。
・ところが、『寸法記』の大龍柱図は、向き合いに描かれ、宝珠を掴む前脚も戦前龍柱とは逆になっている。
・『寸法記』龍柱図は〈古代エジプトの絵画や浮彫等の横向き表現と同様に、描きにくい正面向き龍頭や宝珠を掴む脚の描画を、描きやすいように向き合いにして前脚も逆に描いている〉と解釈する。この解釈を根拠に、『寸法記』の大龍柱図は信頼性に欠けると主張している（西村 1993：p.95）。

・ここでは、『寸法記』大龍柱図の前脚描画の解釈について、数千年前のエジプト絵画による解釈ではなく、同時代琉球の龍図像（絵図、衣装模様、彫刻など）199 例と、琉球王権の龍図像に規制を与えている中国皇帝関係の龍図像 104 例から検証した。

・検証結果は、琉球の珠取龍の構図は『寸法記』と同じ構図が原則で、戦前の大龍柱・小龍柱の構図の方が異例であった。
・『寸法記』龍柱図は、琉球の伝統的な珠取龍の構図にもとづいて描かれている。戦前龍柱との違いを根拠に、『寸法記』の大龍柱図の信頼性を否定することはできない。

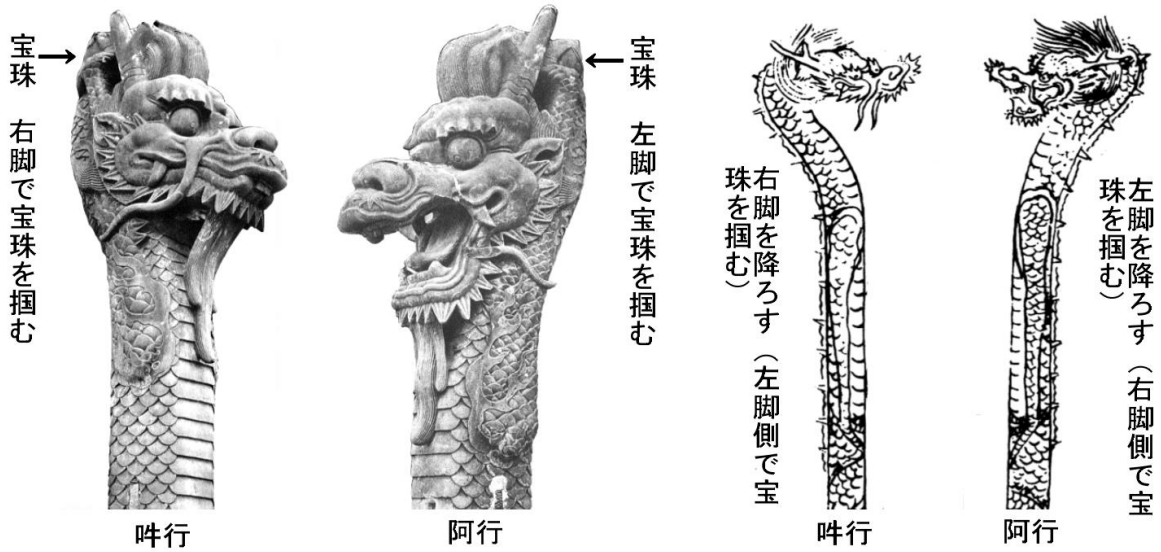


図１：戦前大龍柱（左）と『寸法記』大龍柱（右）の宝珠を掴む前脚のちがい
宝珠を掴んで上に突き出す前脚が、戦前大龍柱と『寸法記』大龍柱図では左右逆に描かれている。

1）中国冊封体制における龍図像の規制

・龍は、古くから中国皇帝の象徴として位置づけられ、龍図像の使用には厳しい規制があった。
・清朝では、皇帝専用の龍図像（正龍、五爪、九龍など）があり、清朝皇帝から冊封を受けた琉球国王は郡王クラスの莽龍（四爪龍）の使用が許されていた。
・正殿前大龍柱も、そうした皇帝との君臣関係という規制の範囲内で、琉球王権の図像としての使用が許されてきた。
・そして、大龍柱を含む正殿の龍柱図像は、琉球国王の冊封儀礼の度に皇帝使者の目に曝されており、決して琉球側の意のままになるものではなかったことを知っておくべきだろう。

2）龍図像の分類と構図

・中国では、龍図像を正龍（正面向き）、昇竜（龍頭が上を向き龍体は下になる）、行龍（横向きの構図）、団龍（横向きで全体形が円形状）に分類している。
・ここでは、一対の双龍構図をとる大龍柱を分析するために、龍図像を①**正龍**、②**双龍**（一対構図の昇竜・行龍・団龍）、③**その他**（正龍や双龍と確認できない龍など）に分類する。
・龍図像は、口の開閉で**阿形**（開口）と**吽形**（閉口）に分ける。双龍では、一般に右側が阿形、左側が吽形になるが、清朝皇帝の双龍ではすべて阿形で、吽形がない。
・龍図像は、**前脚の左右どちらかを前方または頭上に突き出す**構図をとる（一部に両脚を頭上に突き出すものもある）。
・突き出す前脚は、阿形は右脚、吽形は左脚が多い。

珠取の正龍（阿行、ＲＬ構図）　　**珠取双龍（阿吽ＲＬ構図）**

図２：龍図像の分類

・宝珠を掴む前脚が、阿形吽形で右脚か左脚かが、『寸法記』大龍柱図の信頼性に関わる問題である。
・ここでは、突き出した前脚が**右脚の場合を「R」、左脚の場合を「L」**と記号化する。
・そして阿形と吽形の場合では次のように記号化する。

阿Ｒ：阿形右前脚を突き出す
阿Ｌ：阿形左前脚を突き出す
吽Ｒ：吽形右前脚を突き出す
吽Ｌ：吽形左前脚を突き出す

3）王府絵図の珠取龍図は全て RL 構図

・上記の分類記号で表示すると、**戦前大龍柱は「阿 L 吽 R」（LR）**になる。一方**『寸法記』は、戦前大龍柱とは逆の「阿 R 吽 L」（RL）**になる。

・『寸法記』では、大龍柱だけを RL 構図で描いているのではない。
・同史料には下記 6 対の珠取双龍と 6 対の双龍が描かれているが、すべて RL 構図である。

「正殿図」に大小龍柱 2 対の珠取双龍、唐玻豊妻飾りに 1 対の双龍図
「唐玻豊繪図」に珠取双龍 1 対、双龍 2 対
「石階段図」に大小龍柱の 2 対の珠取双龍図
「御差床之図」の幕に 1 対の双龍図
「大庫理御床真正面之図」に珠取双龍 1 対、双龍 1 対
「大庫理御差床真正面之図」に 2 対の双龍

・『寸法記』だけでなく王府の他の絵図でも宝珠を掴む前脚を PL 構図で描いている。
・1838 年の尚育王冊封の記録画と考えられる「正殿前仲秋宴図」と「正殿前城元設営絵図」には、それぞれ大龍柱を含め 4 対の RL 構図の珠取双龍図と双龍図が描かれている。
・1846 年の「百浦添普請絵図帳」（尚家文書）でも『寸法記』と同じ 8 対の RL 構図の珠取双龍図と双龍図がある。

・『寸法記』の龍柱図が、宝珠を掴む前脚の左右を描きにくいので逆描画したとすると、王府の絵師たちは、1768 年『寸法記』から 1846 年「御普請絵図帳」までの少なくとも 78 年間にわたって、大龍柱に限らず全ての珠取双龍図において逆描画を続けてきたということになる。
・このような解釈が果たして妥当なのか、数千年前のエジプト絵画による解釈ではなく、同時代琉球の龍図像 153 例で検証した。

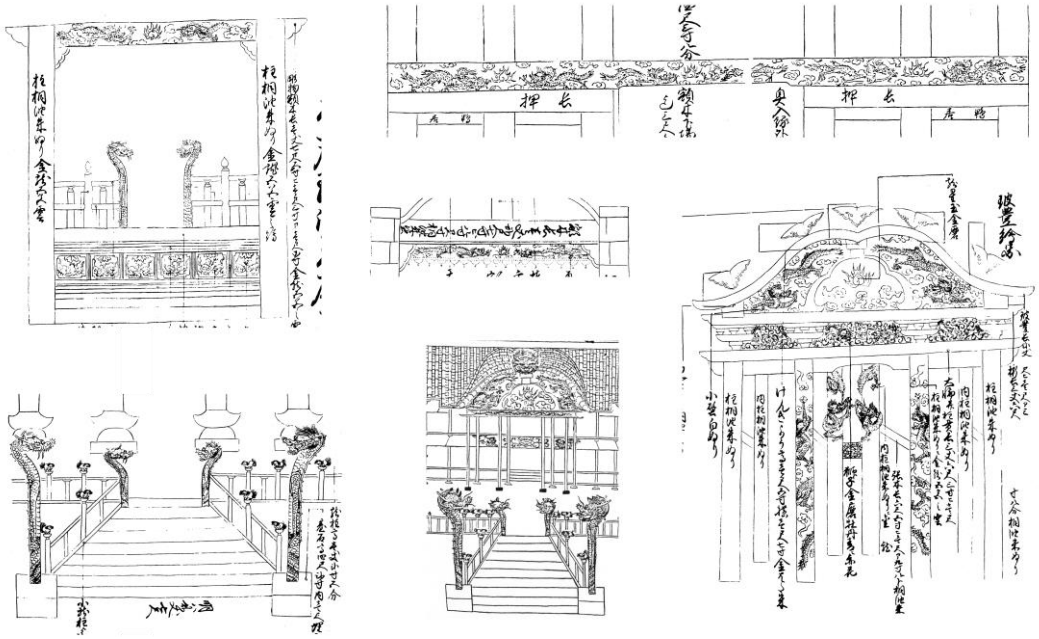


図 3：『寸法記』に描かれた珠取双龍図と非珠取双龍図（全てＲＬ構図）

4）近世琉球の龍図像の集成

・本項文末に掲げた**表２**は、近世琉球の珠取龍図像 46 例、**表３**は同じく近世琉球の非珠取龍図像 153 例、**表４**は清朝皇帝・皇后関係衣装の龍図像 104 例について、正龍、双龍、珠取、阿吽、突き出す前脚の左右を点検した暫定データ表である。

・龍図像は、漆工・絵画・差図を中心に染織物・図案・木石彫・金工・陶器・文書など多種類にわたって見られる。

・大量の図像を点検したので、なかには判断ミスもあるかも知れないが、とりあえず暫定データとして提示しておく。

・**表１**は、表２～４を集計した総括表である。

・**大龍柱と同じ阿吽の珠取双龍は 27 例（赤文字）で、うち 25 例が『寸法記』と同じＲＬ構図、ＬＲ構図は戦前の大龍柱・小龍柱の２例のみであった。**

・双龍構図に限らずに珠取龍でみると、『寸法記』と同じ阿形 R は 32 例、吽形 L は 29 例。戦前龍柱と同じ阿形 L は戦前の大小龍柱２例のみ。吽形 R は戦前大小龍柱の他に１例の３例であった。

・宝珠を掴まない非珠取の阿吽双龍でも、61 例のうち『寸法記』と同じ RL 構図が 30 例と最も多く、戦前の大龍柱・小龍柱と同じ LR 構図は 10 例であった。

・**近世琉球においては、非珠取双龍の図像でも RL 構図が主流だが、宝珠を掴む珠取双龍の図像になると『寸法記』のように RL 構図で描くのが「原則」とみてよい。**

・『寸法記』大龍柱図の宝珠を掴む前脚の描画は、描きにくいので逆描画にしたのではなく、近世龍における龍図像描画の原則に従って描いている。

表１：琉球・清朝皇帝関係龍図像の集計

分類		前脚の構図	琉球関係資料		清朝皇帝皇后衣装など		備考
			珠取	非珠取	珠取	非珠取	
正龍	阿行	L－　（阿行左脚）	1	2			
		R－　（阿行右脚）	3	4	2	28	
		LR　（阿行両脚）		7		10	
		計	4	13	2	38	
双龍	阿吽双龍	ＬＲ　（阿行左脚・吽行右脚）	2	10			・原則は「寸法記」と同じRL構図
		ＲＬ　（阿行右脚・吽行左脚）	25	30			・LR構図の珠取龍図像は
		ＬＬ　（阿行左脚・吽行左脚）		19			戦前の正殿前大小龍柱のみ
		ＲＲ　（阿行右脚・吽行右脚）		2		1	・清朝の阿吽双龍は清朝初期のみ。
	阿行双龍	ＬＲ　（阿行左脚・阿行右脚）	5	22	4	41	・清朝の双龍は全て阿行
		ＲＲ　（阿行右脚・阿行右脚）		4			
	吽行双龍	ＬＲ　（吽行左脚・吽行右脚）				1	・清朝の吽行双龍は清朝初期のみ。
		計	32	87	4	43	
その他	阿行	Ｌ－　（阿行左脚）		19			
		Ｒ－　（阿行右脚）	5	23		1	
		ＬＲ　（阿行両脚）		1			
	吽行	－Ｌ　（吽行左脚）	4	9			
		－Ｒ　（吽行右脚）	1	1			
		計	10	53	0	1	
合計			46	153	6	82	
			199		88		

引用文献

西村貞雄 1993「首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察」『琉球大学教育学部紀要』第 42 集Ⅰ、琉球大学教育学部。

表２：近世琉球の龍図像の構図集成

No.	分類	名称	構図		突き出す前脚 ●●前脚突き出し（◎◎は推定、＊は珠取） 阿行 左L	阿行 右R	吽行 左L	吽行 右R	所蔵	出典
1	石彫	首里城正殿前大龍柱	双龍	阿L*吽R*	●*			●*	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№045・46/鎌376
2	石彫	首里城正殿前小龍柱	双龍	阿L*吽R*	●*			●*	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№47/鎌329
3	差図	正殿図a/大龍柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
4	差図	正殿図b/小龍柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
5	差図	唐玻豊絵図a/大龍柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
6	差図	唐玻豊絵図b/小龍柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
7	差図	唐玻豊絵図c/向拝柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
8	差図	唐玻豊絵図d/大龍柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
9	差図	唐玻豊絵図e/小龍柱/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
10	差図	大庫理御差床真正面之図/「尚家文書」	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		那覇市歴史博物館	『百浦添御普請絵図帳』
11	木彫	那覇文廟孔子祭典用具装飾竜	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№230/鎌157,327
12	絵図	城元設営図/大龍柱	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№40/ 鎌277/鎌277
13	絵図	尚元王御後絵/幕	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№409/鎌140
14	絵図	城元仲秋宴之図/大龍柱	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№41/鎌018/鎌18
15	絵図	城元仲秋宴之図/小龍柱	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№41/鎌018/鎌18
16	絵図	尚寧王御後絵/幕	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№410/鎌141
17	絵図	尚豊王御後絵/幕	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№411/鎌137
18	図案	皮弁服仕立図案648	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№437/鎌617
19	差図	正殿図a/大龍柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
20	差図	正殿図b/小龍柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
21	差図	玻豊絵図a/大龍柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
22	差図	玻豊絵図b/小龍柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
23	差図	玻豊絵図c/向拝柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		●*	●*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
24	差図	玻豊絵図d/大龍柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
25	差図	玻豊絵図e/小龍柱/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
26	差図	大庫理御差床真正面之図/『寸法記』	双龍	阿R*吽L*		◎*	◎*		沖縄県立芸大	鎌倉資料
27	図案	龍蝋燭金磨	双龍	阿R*吽L*		●*	◎*		沖縄県立博物館・美術館	『冠船之時御道具之図』「壱対壱ハ口開壱ハ口閉」
28	織物	赤地剣山龍瑞雲模様裂(御唐衣装裂）11a	双龍	阿L*阿R*	●*	●*			沖縄美ら島財団	『王家の秘宝』沖縄美ら島財団2018№11
29	織物	茶地襦珍布（御唐衣装裂）12b	双龍	阿L*阿R*	◎*	◎*			沖縄美ら島財団	『王家の秘宝』沖縄美ら島財団2018№12
30	絵図	尚育王御後絵50a/衣装	双龍	阿L*阿R*	●*	●*			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№416/鎌50
31	織物	赤地龍瑞雲剣山模様襦珍御唐衣装16b	双龍	阿L*阿R*	◎*	◎*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.16
32	織物	蟒緞（唐衣装裂）17b	双龍	阿L*阿R*	◎*	◎*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17
33	木彫	建築部材/龍	正龍	阿L*	●*				沖縄県立芸大	鎌倉資料№356
34	図案	黄色塗香案卓裙	正龍	阿R*		●*			沖縄県立博物館・美術館	『冠船之時御道具之図』
35	図案	金壺銀壺図/唐御代替付慶賀献上物帳	正龍	阿R*		●*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.22
36	図案	国王位牌下図	正龍	阿R*		●*			沖縄県立博物館・美術館	
37	漆工	朱塗龍文堆錦合子	その他	阿R*		●*			オランダ国立民族学博物館	『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展』求龍堂1992№105
38	絵図	崇元寺本堂天井竜図164	その他	阿R*		●*			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№217/鎌164
39	織物	赤地龍瑞雲剣山模様襦珍御唐衣装16c	その他	阿R*		●*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.16
40	図案	龍下図a	その他	阿R*		●*			沖縄県立博物館・美術館	
41	織物	蟒緞（唐衣装裂）17c	その他	阿R*		◎*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17
42	石彫	竜淵橋蘭干羽目325	その他	吽L*			●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№137/鎌325
43	石彫	玉陵蘭干羽目	その他	吽L*			●*		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№151/鎌300
44	図案	龍下図b	その他	吽L*			●*		沖縄県立博物館・美術館	
45	図案	龍下図c	その他	吽L*			●*		沖縄県立博物館・美術館	
46	図案	天保十三年製貝摺焼香箱	その他	吽R*				●*		『琉球漆器考』

表３：近世琉球の非珠取龍図像の集成

No.	分類	名称	構図		突き出す前脚 ●●前脚突き出し（◎◎は推定） 阿行 左L	阿行 右R	吽行 左L	吽行 右R	所蔵	出典
1	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿東道盆1-①	双龍	阿L吽R	●			●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№1-①
2	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿東道盆2	双龍	阿L吽R	●			●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№2
3	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿東道盆3	双龍	阿L吽R	●			●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№3
4	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿東道盆4a	双龍	阿L吽R	●			●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№4
5	織物	国王着用足袋	双龍	阿L吽R	●			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№447,448/鎌568,569
6	図案	国王着用足袋刺繍下絵	双龍	阿L吽R	◎			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№446/鎌106
7	染物	国王着用紅型竜文襯衣42b	双龍	阿L吽R	●			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№439/鎌42
8	木彫	仏壇上部左右隅透漆彫飾	双龍	阿L吽R	●			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№538,539/鎌256,257
9	漆工	扁額縁/「妙霊普濟」	双龍	阿L吽R	●			●	枚聞神社	『復元模造品製作に係る調査報告書』西原町教委2018
10	木彫	龍彫刻香炉	双龍	阿L吽R	●			●	沖縄県立芸大	鎌倉資料№145

11	差図	御差床之図/『寸法記』	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	鎌倉資料
12	織物	大庫理御床之図/『寸法記』	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	鎌倉資料
13	絵図	唐玻豊妻飾/仲秋宴之図	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№41/鎌018/鎌18
14	図案	寛延元年製貝摺沈金混淆卓	双龍	阿R吽L	●	●		『琉球漆器考』
15	木彫	金竜蝋燭	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№398/鎌863
16	漆工	黒漆雲龍鳳凰螺鈿長文箱	双龍	阿R吽L	●	◎	浦添市美術館	『館蔵琉球漆芸』浦美1995№26
17	漆工	黒漆雲龍螺鈿東道盆49a/側面1	双龍	阿R吽L	●	●	那覇市歴史博物館	『琉球漆器』徳川美・根津美1978№49
18	図案	国王着用衣料図案	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№441/鎌54
19	染物	国王着用紅型竜文襯衣42a	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№439/鎌42
20	絵図	尚円王御後絵/幕	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№407/鎌136
21	絵図	尚真王御後絵/幕	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№408/鎌52
22	絵図	城元設営図/唐玻豊妻飾り	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№40/鎌277/鎌277
23	石彫	石碑/首里新建聖廟碑文	双龍	阿R吽L	●	●		『琉球金石文拓本集成』沖縄県立図書館1982
24	石彫	石碑/琉球国新建国学碑文	双龍	阿R吽L	●	●		『琉球金石文拓本集成』沖縄県立図書館1981
25	木彫	戦前正殿唐玻豊/妻飾り	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№44/鎌1237
26	絵	那覇文廟孔子像/背後板絵	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№226/鎌1142
27	差図	玻豊絵図e/唐玻豊妻飾/『寸法記』	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	鎌倉資料
28	差図	玻豊絵図f/内柱/『寸法記』	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	鎌倉資料
29	差図	玻豊絵図h/妻飾り/『寸法記』	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	鎌倉資料
30	図案	皮弁服仕立図案	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№438/鎌648
31	図案	皮弁服仕立図案617	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№436/鎌647
32	漆工	扁額縁/「蔭長」	双龍	阿R吽L	●	●	花尾神社	「復元模造品製作に係る調査報告書」西原町教委2018
33	漆工	扁額縁/「永頼」	双龍	阿R吽L	●	●	一宮神社	『復元模造品製作に係る調査報告書』西原町教委2018
34	漆工	扁額縁/「高?延薫」	双龍	阿R吽L	●	●	岡崎市美術博物館	「復元模造品製作に係る調査報告書」西原町教委2018
35	漆工	扁額縁/「生而神霊」	双龍	阿R吽L	●	●	枚聞神社	『復元模造品製作に係る調査報告書』西原町教委2018
36	漆工	扁額縁/「徳光普照」	双龍	阿R吽L	●	●	枚聞神社	『復元模造品製作に係る調査報告書』西原町教委2018
37	漆工	扁額縁/「徳?海天」	双龍	阿R吽L	●	●	枚聞神社	『復元模造品製作に係る調査報告書』西原町教委2018
38	漆工	扁額縁/「瞻仰」	双龍	阿R吽L	●	●	花尾神社	「復元模造品製作に係る調査報告書」西原町教委2018
39	漆工	扁額縁/「荘厳國土」	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立博物館・美術館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008№123
40	木彫	竜鳳凰蓮台	双龍	阿R吽L	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№398/鎌863
41	図案	嘉永元年製茶盆	双龍	阿L吽L	●	●		『琉球漆器考』
42	漆工	黒漆雲龍文螺鈿大盆53	双龍	阿L吽L	●	●	浦添市美術館	『琉球漆器の美展』浦添市1983№53
43	漆工	黒漆雲龍文螺鈿盤104	双龍	阿L吽L	●	●	ベルリン国立博東洋美術館	『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展』ドイツ・日本研究所1992№104
44	漆工	黒漆雲龍文螺鈿盤158	双龍	阿L吽L	●	●	メトロポリタン美術館	『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展』求龍堂1992№158
45	漆工	黒漆雲龍文螺鈿盆54	双龍	阿L吽L	●	●	浦添市美術館	『琉球漆器の美展』浦添市1983№54
46	漆工	黒漆雲龍文螺鈿盆55	双龍	阿L吽L	●	●	浦添市美術館	『琉球漆器の美展』浦添市1983№55
47	漆工	黒漆雲龍螺鈿東道盆49b/蓋表	双龍	阿L吽L	●	●	那覇市歴史博物館	『琉球漆器』徳川美・根津美1978№49
48	漆工	黒漆雲龍螺鈿盆28	双龍	阿L吽L	●	●	沖縄美ら島財団	『首里城に魂を！』海洋博官吏財団2012№28
49	漆工	黒漆火炎龍瑞雲螺鈿大盤29	双龍	阿L吽L	●	●	沖縄美ら島財団	『首里城に魂を！』海洋博官吏財団2012№29
50	漆工	黒漆珠取双龍螺鈿大盤48	双龍	阿L吽L	●	●	サントリー美術館	『琉球漆器』徳川美・根津美1978№48
51	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆12	双龍	阿L吽L	●	●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№12
52	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆34	双龍	阿L吽L	●	●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008№34
53	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆35	双龍	阿L吽L	●	●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008№35
54	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆36	双龍	阿L吽L	●	●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008№36
55	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆37	双龍	阿L吽L	●	●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008№37
56	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆39	双龍	阿L吽L	●	●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008№39
57	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆47	双龍	阿L吽L	●	●	大仁堂	『琉球漆器』徳川美・根津美1978№47
58	図案	君使官朱塗泥書	双龍	阿L吽L	●	●	沖縄県立博物館・美術館	「冠船之時御道具之図」
59	漆工	龍文皿　Tray with decoration of dragons	双龍	阿L吽L	●	●	メトロポリタン美術館	"Ewast Asian Lacquruer"J.C.WATT1992,№169
60	漆工	黒塗青貝双龍文八花御菓子器	双龍	阿R吽R	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№283/鎌297
61	図案	国王着用紅型竜文襯衣図案	双龍	阿R吽R	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№440/鎌263
62	図案	黄色塗香案卓裙	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立博物館・美術館	「冠船之時御道具之図」
63	漆工	黒漆山水人物螺鈿衝立	双龍	阿LR	●	●	浦添市美術館	『琉球漆器の美展』浦添市1983№68
64	文書	康熙帝勅諭・尚貞王宛/文書	双龍	阿LR	●	●	宮内庁書陵部	『海の帝国琉球』国立歴民博2021№VI-04
65	織物	国王平常着用御羽織291b	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№455/鎌291
66	織物	紺地龍丸模様緞子唐衣装	双龍	阿LR	●	●	那覇市歴史博物館	『琉球　美の宝庫』サントリー美術館2018№98
67	絵図	尚育王御後絵50c/団扇	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№416/鎌50
68	絵図	尚育王御後絵50d/幕	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№416/鎌50
69	絵図	尚敬王御後絵135a/衣装	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№413/鎌135
70	絵図	尚敬王御後絵135c/団扇	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№413/鎌135
71	絵図	尚敬王御後絵135d/幕	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№413/鎌135
72	絵図	尚?王御後絵139b/衣装	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№415/鎌139
73	絵図	尚?王御後絵139c/団扇	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№415/鎌139
74	絵図	尚?王御後絵139e/幕	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№415/鎌139
75	絵図	尚純公御後絵/衣装	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№423/鎌138
76	絵図	尚貞王御後絵134a/団扇	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№412/鎌134
77	絵図	尚貞王御後絵134b/幕	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№412/鎌134
78	絵図	尚穆王御後絵51a/衣装	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№414/鎌51
79	絵図	尚穆王御後絵51c/団扇	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№414/鎌51
80	絵図	尚穆王御後絵51d/幕	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№414/鎌51
81	木彫	飛竜把手煙草盆	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№399/鎌1143
82	絵図	那覇文廟/孔子像及び四聖配像/幕	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№229/鎌680
83	木彫	那覇文廟孔子神位b	双龍	阿LR	●	●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』№227/鎌736
84	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆10	双龍	阿RR		●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№10
85	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆11	双龍	阿RR		●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№11
86	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆4	双龍	阿RR		●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№4
87	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿盆8	双龍	阿RR		●	北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004№8

88	織物	赤地剣山龍瑞雲模様裂(御唐衣装裂）11b	正龍	阿L	●			沖縄美ら島財団	『王家の秘宝』沖縄美ら島財団2018No.11
89	織物	茶地襦珍布（御唐衣装裂）12a	正龍	阿L	◎			沖縄美ら島財団	『王家の秘宝』沖縄美ら島財団2018No.12
90	織物	赤地龍瑞雲剣山模様襦珍御唐衣装16a	正龍	阿R		●		那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:No..16
91	漆工	金地雲龍螺鈿墨箱	正龍	阿R		●		那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.60
92	織物	国王平常着用御羽織291a	正龍	阿R		●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.455/鎌291
93	織物	蟒緞（唐衣装裂）17a	正龍	阿R		●		那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:No..17
94	金工	石帯２	正龍	阿LR上	●	●		那覇市歴史博物館	『琉球　美の宝庫』サントリー美術館2018No.99
95	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿東道盆4b/天板	正龍	阿LR上	●	●		北京故宮博物院	『琉球王朝の秘宝』那覇市歴史資料室2004No.4
96	絵図	尚育王御後絵50b/衣装	正龍	阿LR上	●	●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.416/鎌50
97	絵図	尚敬王御後絵135b/衣装	正龍	阿LR上	●	●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.413/鎌135
98	絵図	尚?王御後絵139a/衣装	正龍	阿LR上	●	●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.415/鎌139
99	絵図	尚穆王御後絵51b/衣装	正龍	阿LR上	●	●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.414/鎌51
100	木彫	那覇文廟孔子神位a	正龍	阿LR上	●	●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.227/鎌736
101	金工	石帯1	その他	阿L	●			那覇市歴史博物館	『琉球・美の宝庫』サントリー美術館2018No.99
102	織物	王妃手?80c	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.463/鎌80
103	図案	嘉永元年製木地茶碗/蓋	その他	阿L	●				『琉球漆器考』
104	図案	嘉永元年製木地茶碗/身	その他	阿L	●				『琉球漆器考』
105	図案	嘉永元年製茶椀/蓋	その他	阿L	●				『琉球漆器考』
106	木彫	鐘蟠竜印籠臥牛根付	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.533/鎌588
107	漆工	黒漆雲龍螺鈿東道盆49c/側面2	その他	阿L	●			那覇市歴史博物館	『琉球漆器』徳川美・根津美1978No.49
108	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀40a/蓋	その他	阿L	●			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.40
109	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀41a/身	その他	阿L	●			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.41
110	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀42a/身	その他	阿L	●			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.42
111	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀43a/身	その他	阿L	●			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.43
112	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀44a/蓋	その他	阿L	●			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.44
113	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀44b/身	その他	阿L	●			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.44
114	図案	黒漆龍鳳凰獅子堆彩文庫	その他	阿L	●			浦添市美術館	『琉球漆器の美展』浦添市1983No.166
115	漆工	黒塗青貝竜文椀/蓋	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.286/鎌527
116	漆工	朱塗雲竜金箔絵箱	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.474/鎌156
117	絵図	崇元寺本堂天井竜図160	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	鎌倉資料No.160
118	図案	皮弁服竜金筋入補子図案	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.415/鎌616,106
119	石彫	竜淵橋蘭干羽目672	その他	阿L	●			沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.136/鎌672
120	金工	石帯３	その他	阿R		●		那覇市歴史博物館	『琉球・美の宝庫』サントリー美術館2018No.99
121	木彫	雲竜彫印籠	その他	阿R		●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.534/鎌587,589
122	織物	王妃手?80a	その他	阿R		●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.463/鎌80
123	図案	銀之平台	その他	阿R		●		沖縄県立博物館・美術館	「御冠船之時御道具」
124	図案	金之焼付御盃台	その他	阿R		●		沖縄県立博物館・美術館	「御冠船之時御道具」
125	図案	金焼付宥口壺	その他	阿R		●		沖縄県立博物館・美術館	『冠船之時御道具之図』
126	図案	龍下図a	その他	阿R		●		沖縄県立博物館・美術館	
127	図案	龍下図b	その他	阿R		●		沖縄県立博物館・美術館	
128	漆工	黒漆珠取龍螺鈿琵琶	その他	阿R		●		徳川美術館	『琉球漆器』徳川美・根津美1978No.44
129	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀45/身(蓋無)	その他	阿R		●		北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.45
130	漆工	黒漆龍鳳凰箔絵食籠	その他	阿R		●		浦添市美術館	『岡コレクション名品展』浦美1992No.36
131	漆工	黒漆龍鳳吉祥文漆絵密陀絵箔絵長線	その他	阿R		●		徳川美術館	『館蔵琉球漆芸』浦添市美術館1995No.120
132	漆工	黒漆龍鳳吉祥文漆絵密陀絵箔絵長線	その他	阿R		●		浦添市美術館	『館蔵琉球漆芸』浦美1995No.165
133	漆工	康熙帝勅諭・尚貞王宛/外筒	その他	阿R		●		宮内庁書陵部	『海の帝国琉球』国立歴民博2021No.VI-04
134	漆工	朱漆珠取龍螺鈿盆	その他	阿R		●		徳川美術館	『琉球漆器』徳川美・根津美1978No.32
135	漆工	朱漆龍鳳凰堆錦衝立	その他	阿R		●		徳川美術館	『館蔵琉球漆芸』浦添市美術館1995No.165
136	漆工	透漆雲龍金箔絵箱	その他	阿R		●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.475/鎌385
137	絵図	関帝王167	その他	阿R		●		沖縄県立博物館・美術館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.167
138	絵図	崇元寺本堂天井竜図162	その他	阿R		●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.216/鎌162
139	漆工	堆彩 Raised polychrome lacquer	その他	阿R		●		メトロポリタン美術館	"Ewast Asian Lacquruer"J.C.WATT1992,No.172 b
140	織物	緞子地綵繍神衣装部分	その他	阿R		●			『沖縄文化の遺宝』No.458/鎌201
141	木彫	花米膳	その他	阿R		●		沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.400/鎌1145
142	陶器	龍飾小壺	その他	阿R		●		沖縄県立芸大	鎌倉資料No.565
143	漆工	獅子牡丹堆彩中央卓	その他	阿LR前	●	●		沖縄美ら島財団	『首里城のデザイン』海洋博管理財団2011No.31
144	織物	王妃手?80d	その他	吽L			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.463/鎌80
145	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀21a/蓋	その他	吽L			●	個人	『琉球漆器名品展』浦美2008No.21
146	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀21b/身	その他	吽L			●	個人	『琉球漆器名品展』浦美2008No.21
147	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀40b/身	その他	吽L			●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.40
148	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀41b/蓋	その他	吽L			●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.41
149	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀42b/蓋	その他	吽L			●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.42
150	漆工	黒漆宝珠双龍螺鈿椀43b/蓋	その他	吽L			●	北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.43
151	漆工	黒塗青貝竜文椀/身	その他	吽L			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.286/鎌527
152	漆工	朱漆龍牡丹七宝繋文沈金椀	その他	吽L			●	那覇市歴史博物館	『美術工芸品収蔵品展』那覇市歴史資料室1999No.37
153	織物	王妃手?80b	その他	吽R			●	沖縄県立芸大	『沖縄文化の遺宝』No.463/鎌80

表４：清朝皇帝関係の龍図像集成　＊「琉球/」は皇帝から琉球国王への下賜品

No.	分類	名称	構図		突き出す前脚 ●●前脚突き出し ◎◎は推定　＊は珠取				所蔵	出典
					阿行		吽行			
					左L	右R	左L	右R		
1	絵画	順治帝朝服像a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.171
2	絵画	順治帝朝服像b	双龍	吽L吽R			●	●	北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.171
3	文書	紅色諭旨(紅票)康熙55年a	双龍	阿R吽L		●	●		北京故宮博物院	『康熙大帝與太陽王路易十四特展』国立故宮博物院2011No.Ⅱ-18
4	文書	紅色諭旨(紅票)康熙55年b	その他	阿L吽R	●	●			北京故宮博物院	『康熙大帝與太陽王路易十四特展』国立故宮博物院2011No.Ⅱ-18
5	絵画	康熙帝朝服像c	正龍	阿LR上	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.8
6	絵画	康熙帝朝服像d	正龍	阿LR前	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.8
7	絵画	康熙帝朝服像b	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.8
8	絵画	雍正帝朝服像c	正龍	阿LR前	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.9
9	絵画	雍正帝朝服像b	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.9
10	絵画	乾隆帝朝服像a	正龍	阿LR上	●	●			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.172
11	絵画	乾隆帝朝服像(青年期)b	正龍	阿LR前	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.10
12	絵画	乾隆帝朝服像b	正龍	阿LR前	●	●			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.172
13	絵画	乾隆帝朝服像(青年期)a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.10
14	絵画	乾隆帝著冬季礼服的肖像a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『龍袍』王智敏1994No.8
15	絵画	乾隆帝朝服像c	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.172
16	絵画	同治皇帝像a	正龍	阿LR上	●	●			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.172
17	絵画	同治皇帝像b	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.172
18	織物	黄緞繍吉服袍嘉慶b	正龍	阿LR上	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.10
19	絵画	礼服盛装的皇后肖像	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.73
20	織物	皇帝朝袍乾隆a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.1
21	織物	皇帝夏季朝袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.2
22	織物	皇帝冬期朝袍雍正a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.3
23	織物	皇帝夏季朝袍嘉慶a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.4
24	織物	皇帝夏季紗朝袍嘉慶a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.5
25	織物	皇帝夏季紗朝袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.6
26	織物	皇帝朝袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.7
27	織物	黄緞繍吉服袍嘉慶a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.10
28	織物	赭色緞穿朱繍吉服袍乾隆b	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.11
29	織物	孔雀羽穿珠繍吉服袍乾隆b	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.12
30	織物	明黄緞繍吉服袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.13
31	織物	藍緞繍吉服袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.15
32	織物	藍色紗繍吉服袍同治～光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.16
33	織物	藍緞平金穿珠彩繍吉服袍清晩期a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.17
34	織物	藍綢平金繍吉服袍清晩期a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.18
35	織物	絳色織妝花紗吉服袍清晩期a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.19
36	織物	?絲吉服袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.21
37	織物	米黄緞繍吉服袍同治～光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.22
38	織物	絳色緞繍吉服袍料同治～光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.23
39	織物	藍色緞繍吉服袍料光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.24
40	織物	赭色緞穿朱繍吉服袍乾隆c	正龍	阿LR上	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.11
41	織物	赭色緞穿珠繍吉服袍乾隆a	双龍	阿L阿R	●＊	●＊			北京故宮博物院	『龍袍』王智敏1994No.11
42	織物	孔雀羽穿珠繍吉服袍乾隆a	双龍	阿L阿R	●＊	●＊			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.12
43	絵画	康熙帝朝服像a	正龍	阿R		●＊			北京故宮博物院	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008No.8
44	絵画	康熙帝朝服像e	正龍	阿R		●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.8
45	絵画	雍正帝朝服像a	正龍	阿R		●＊			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.9
46	絵画	雍正帝朝服像d	正龍	阿R		●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.9
47	絵画	乾隆帝朝服像(青年期)c	正龍	阿R		●			北京故宮博物院	『蘇る琉球王国の輝き』県博美2008No.10
48	絵画	乾隆帝著冬季礼服的肖像b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院	『龍袍』王智敏1994No.8
49	織物	皇帝朝袍乾隆b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.1
50	織物	皇帝夏季朝袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.2
51	織物	皇帝冬期朝袍雍正b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.3
52	織物	皇帝夏季朝袍嘉慶b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.4
53	織物	皇帝夏季紗朝袍嘉慶b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.5
54	織物	皇帝夏季紗朝袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.6
55	織物	皇帝朝袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.7
56	織物	孔雀羽穿珠繍吉服袍乾隆c	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.12
57	織物	明黄緞繍吉服袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.13
58	織物	藍緞繍吉服袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.15
59	織物	藍色紗繍吉服袍同治～光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.16
60	織物	藍緞平金穿珠彩繍吉服袍清晩期b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.17
61	織物	藍綢平金繍吉服袍清晩期b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.18
62	織物	絳色織妝花紗吉服袍清晩期b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994No.19

63	織物	?絲吉服袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№21
64	織物	米黄緞繍吉服袍同治～光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№22
65	織物	絳色緞繍吉服袍料同治～光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№23
66	織物	藍色緞繍吉服袍料光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№24
67	絵画	孝誠仁皇后朝服像	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『康熙大帝與太陽王路易十四特展』国立故宮博物院2011№1B-5
68	絵画	孝恭仁皇后朝服像	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『康熙大帝與太陽王路易十四特展』国立故宮博物院2011№1B-7
69	織物	皇后朝袍雍正a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№68
70	織物	皇后朝袍同治a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№69
71	織物	皇后朝袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№70
72	織物	皇后朝掛光緒	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№71
73	織物	皇后吉服袍光緒a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№74
74	織物	明黄緞綉彩雲金龍袷朝袍(皇后用)a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『黄金の輝き展』岡山県美2002№42
75	織物	明黄緞綉彩雲金龍双?字その他袍(皇后用)	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院	『黄金の輝き展』岡山県美2002№44
76	織物	皇后吉服掛a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№76
77	織物	明黄紗繍女吉服袍a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№75
78	織物	石青緞綉彩雲金龍袷朝掛(皇后用)	双龍	阿L阿R	●*	●*			北京故宮博物院	『黄金の輝き展』岡山県美2002№41
79	織物	皇后朝掛	双龍	阿L阿R	●*	●*			北京故宮博物院	『北京の紫禁城』屈志静199p.166
80	織物	明黄紗繍女吉服袍b	正龍	阿LR上	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№75
81	織物	皇后朝袍雍正b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№68
82	織物	皇后朝袍同治b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№69
83	織物	皇后朝袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№70
84	織物	皇后吉服袍光緒b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№74
85	織物	明黄緞綉彩雲金龍袷朝袍(皇后用)b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院	『黄金の輝き展』岡山県美2002№42
86	織物	皇后吉服掛b	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№76
87	織物	緑色緞繍蟒袍四爪清代王公以下官吏b	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№25
88	織物	穹亭法会時僧侶法袍服1四爪a	双龍	阿L阿R	●	●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№43
89	織物	緑色緞繍蟒袍四爪清代王公以下官吏a	正龍	阿R		●			北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№25
90	織物	穹亭法会時僧侶法袍服2四爪b	双龍	吽L吽R			●	●	北京故宮博物院?	『龍袍』王智敏1994№43
91	織物	琉球/赤地剣山龍瑞雲模様裂(御唐衣装裂)	双龍	阿L阿R	●	●			沖縄美ら島財団	『王家の秘宝』沖縄美ら島財団2018№11
92	織物	琉球/唐衣装・蟒緞a	双龍	阿L阿R	●*	●*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17
93	文書	琉球/康熙帝勅諭・尚貞王宛文書	双龍	阿L阿R	●	●			宮内庁書陵部	『海の帝国琉球』国立歴民博2021№Ⅵ-04
94	織物	琉球/御唐衣装a	双龍	阿L阿R	◎	◎			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.16
95	織物	琉球/唐衣装・蟒緞c	双龍	阿L阿R	◎	◎			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17
96	織物	琉球/茶地襦珍布（御唐衣装裂）	双龍	阿L阿R	◎	◎			沖縄美ら島財団	『王家の秘宝』沖縄美ら島財団2018№12
97	織物	琉球/御唐衣装c	正龍	阿R		●			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.16
98	織物	琉球/唐衣装・蟒緞e	正龍	阿R		●			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17
99	漆工	琉球/康熙帝勅諭・尚貞王宛外筒	その他	阿R		●			宮内庁書陵部	『海の帝国琉球』国立歴民博2021№Ⅵ-04
100	織物	琉球/御唐衣装b	その他	阿R		●			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.16
101	織物	琉球/唐衣装・蟒緞b	その他	阿R		●*			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17
102	織物	琉球/唐衣装・蟒緞d	その他	阿R		◎			那覇市歴史博物館	『甦る琉球王国の輝き』県博美2008:№.17